

アジア女性基金公開フォーラムの記録

—日本と韓国—  
**過去の記憶と  
未来への対話**

小倉紀藏+道上尚史+金恵京+李敬宰+  
饗庭孝典+高崎宗司+伊勢桃代

歴史・過去問題についてのこれまでの語り方や姿勢を問い直し、  
日韓関係の新しい関係のあり方をさぐる対話

2002年11月16日 上智大学(東京・四ツ谷)  
主催 財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
後援 外務省



財団法人 女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)



——日本と韓国——

# 過去の記憶と未来への対話

2002年11月16日 上智大学・教室

小倉紀藏 東海大学助教授  
道上尚史 外務省課長  
金恵京 早稲田大学大学院留学生  
李敬宰 NGO・高槻むくげの会会長  
饗庭孝典 早稲田大学講師  
高崎宗司 津田塾大学教授  
伊勢桃代 アジア女性基金専務理事

## セッション1 ……3

日韓W杯現象、ポストW杯をどう見るか—実態と可能性

プレゼンテーション・道上尚史

## セッション2-1 ……18

これまでの過去・歴史の語り方、扱い方を見直す—教科書・歴史認識問題

プレゼンテーション・高崎宗司

## セッション2-2 ……32

これまでの過去・歴史の語り方、扱い方を見直す—歴史・民族意識、落差の基底

プレゼンテーション・小倉紀藏

## セッション3 ……55

これからの対話・コミュニケーションのために—対話の姿勢、基準

プレゼンテーション・饗庭孝典

《2002 日韓国際交流年企画》

主催 財団法人女性のためのアジア平和国民基金

(アジア女性基金)

後援 外務省

# パネリストのプロフィール

小倉紀藏 OGURA Kizo

1959年東京生まれ。東海大学外国語教育センター助教授。NHKテレビ「アンニョンハシムニカ〜ハングル講座」講師。1983年東京大学ドイツ文学科卒。電通勤務。1995年ソウル大学哲学科博士課程修了。著書『韓国は一個の哲学である』『韓国人のしくみ』講談社現代新書、『韓国、ひき裂かれるコスモス』平凡社、『韓国語はじめての一步』ちくま新書

金惠京 KIM Hae-Kyung

1975年ソウル生まれ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際法専攻博士後期課程。修士論文『慰安婦』問題に対する国際法的考察—国家責任と個人の刑事責任を中心に」、ほか日韓会談についての論文等。明治大学法学部留学・卒業、米国生活を経て早稲田大学大学院。国会で研修。滞日8年

李敬宰 LEE Kyung-Jae

1954年大阪生まれ。高槻むくげの会会長。飲食店経営。大阪・高槻市で、韓国・朝鮮人など多国籍の人びとと日本人の共生社会をめざして活動。「高槻むくげの会」は1972年の創立で30周年。10月「拉致事件に対する在日韓国・朝鮮人の声明」を公表

道上尚史 MICHIGAMI Hisashi

1958年大阪生まれ。外務省経済局国際経済第二課長。東京大学法学部卒業、外務省入省、韓国・米国で研修。ハーバード大学修士課程修了。アジア局、経済局を経て98年から2000年まで在韓国大使館勤務。世界経済とアジア政治安保に詳しい。韓国では25回韓国語で講演し本も出版。『日本外交官、韓国奮闘記』文春新書

高崎宗司 TAKASAKI Soji

1944年茨城生まれ。津田塾大学教授、日本・朝鮮近現代史。著書『「妄言」の原形—日本人の朝鮮観』木犀社、『朝鮮の土となった日本人—浅川巧の生涯』草風館、『検証日韓会談』『植民地朝鮮の日本人』岩波新書

饗庭孝典 AEBA Takanori

1933年東京生まれ。早稲田大学講師、日韓文化交流会議委員、東アジア近代史学会副会長。元NHKソウル特派員。饗庭孝典・NHK取材班『朝鮮戦争・分断38度線の真実を追う』(NHKスペシャル)日本放送出版協会

伊勢桃代 ISE Momoyo

東京生まれ。1969年より国際連合ニューヨーク本部勤務。人事採用・研修部長、国連大学事務局長を歴任。1997年退職しアジア女性基金専務理事・事務局長

**山崎玲子**（進行） 皆さま、大変長らくお待たせいたしました。これより、公開フォーラム「日本と韓国——過去の記憶と未来への対話」を始めさせていただきます。私は本日進行を務めさせていただきます、アジア女性基金の山崎と申します。よろしく願いいたします。

皆さま、本日は土曜の午後にもかかわらず、このようにお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。このフォーラムは2002年日韓国民交流年の企画のひとつとして外務省の後援をいただいております。

はじめに、パネリストの皆さまをご紹介します。向かって左から、イー・キョンジェ（李敬宰）さんです。本日、大阪の高槻市からおいでいただきました。1972年に設立されました「高槻むくげの会」会長で、飲食店を営まれています。そのお隣が道上尚史さんです。外務省経済局国際経済第二課長でいらして、以前、在韓国大使館に勤務されました。そのお隣がキム・ヘギョン（金惠京）さんです。早稲田大学の大学院生でいらして、アジア太平洋研究科国際法専攻博士課程で研究されています。明治大学を卒業され、日本で8年になりますが、この皆さんのなかではいちばん若い方になります。

そのお隣は小倉紀藏さんです。東海大学外国語教育センター助教授でいらして、NHKテレビの「ハングル講座」の講師としておなじみです。韓国に留学され、ソウル大学哲学科博士課程を修了されています。次に饗庭孝典さん。早稲田大学講師です。日韓文化交流会議の委員で、東アジア近代史学会副会長を務められています。また、元NHKソウル特派員でいらっしやいます。お隣が高崎宗司さんです。津田塾大学教授で、日本・朝鮮近代史がご専門です。いちばん右手が、私どもアジア女性基金の専務理事・事務局長の伊勢桃代でございます。27年間国連本部、国連大学事務局長を勤めたあと、現職に就いております。

それではまず、主催者でありますアジア女性基金より、専務理事・事務局長がご挨拶を申し上げます。

**伊勢桃代** 本日は土曜日であり、また非常に寒くなりましたなか、皆さまおいでくださいまして、ありがとうございます。きょうは韓国について経験や知識を交え、いろいろな角度からお話し願うパネラーの方々に来てい

ただいております。本当にありがとうございます。

アジア女性基金は、今年の2月に『戦争の記憶』の著者、イアン・ブルマさんをお招きして、「戦争の記録と未来への対話」というフォーラムを開催いたしました。日本とドイツの戦後処理、戦後のあり方について、ジャーナリスト、法律家、学者などの皆さままで討論をいたしました。つづくこの本日の公開フォーラムは、同じような発想から企画されました。「第2回」と言ってもよいものと思っております。

## 対立的議論でなく理解と発見を

私たちは日々激動する世界にあって、ただ対立的な議論でなく、事実をよく知り冷静にまた率直に語り合うことを通して、国や世界のなかで自分を見つめていかなければならないところにきております。

前回、戦後のドイツ、そして日本とドイツ、果たして通説が本当なのか、もっと別の事実や見方はないのかについて、率直な対話ができたと感じております。今回「日本と韓国」としてありますが、決してこれは対立的な見方による議論を再現するものではありません。私どもアジア女性基金は「慰安婦問題」に取り組み、償いの事業を粛々と進めてまいりましたが、そこで確かに日韓の間に根深い不信があることを痛感いたしました。その議論を繰り返すのではなく、もっと韓国の方々、その社会の成り立ちや仕組みを深く知り、私たちの無理解なところをしっかりと学び、また私たちの言いたいことをどのように表現するか、どういうことができるか、きょうはいろいろと考えていきたいと思っております。

大事なことは、このようにほかの国のことをいろいろと知り、そして理解をするという目的をしっかりと持つことによって、私たち自身が日本というもの、それから私たち自身の知識を深めることができるのではないかと感じております。

ワールドカップサッカーの共催を前後して、日韓の、特に若い方々のあいだでは、大きな変化が起こっているように見受けられます。そのような明るい現状を踏まえて、これまでのような角の立った議論の仕方を変えていく方向、可能性を求めてこのフォーラムを「私たち自身の発見の場」としたいと考えております。

「外交フォーラム」という雑誌の12月号に日韓歴史共同委員会の日本側議長、三谷太一郎先生が「水平的コミュニケーションの学問共同体を」という記事が載せられています。この例としてあげられたのが、1969年に行われた日米開戦前10年についての日米関係史の共同研究です。ここで先生はなにゆえにこの研究が成功したのかにつき、2つの理由をあげておられます。一つはあくまでも個人としての参加であり、席順も姓名のアルファベット順で、謙虚な姿勢で研究を行ったこと。2つめとしては、日米双方の参加者がともに一国的視点を超えようという努力をした点だと言っておられます。私どもはこういう機会をこれからどんどんつくっていかなくてはいけないと思っています。

言うまでもございませんが、パネリストの方々はそれぞれの国や機関、団体などに属しておられますが、それをきょうは代表されているものではありません。そうした活動の場をもつ個々人の意見、提起として受け止めていただきたいと思います。きょうは『韓国人のしくみ』という著書をお持ちの小倉紀藏さんに全体の司会をご依頼して、このフォーラムが楽しくまた意義のある対話、コミュニケーションの場になるように、そういう方向でこのフォーラムをリードしていただきたいとお願いしてございます。では、小倉さん、どうぞよろしく願いいたします。

## セッション1

**小倉紀藏** 小倉紀藏と申します。16時半までですか、かなり長丁場のプログラムになりますけれども、まず全体の構造、仕組みについてちょっと申し上げます。

このセッションは3つに分かれております。セッション1では「日韓のワールドカップ現象、ポストワールドカップをどう見るか」ということについて話し合います。それから、セッションの2では過去の歴史について話し合いますが、このセッション2は前半部分と後半部分に分かれまして、前半部分は主に「教科書・歴史認識問題」について語り合おうと思います。それから、セッション2の後半部分は「歴史・民族意識」、そういうものに

ついて、前半部分とはちょっと違う観点で話を進めていきたいと思います。それからセッション3、最後の部分ですけれども、これは日韓の「これからの対話、コミュニケーションのために」何が必要なのかということです。この部分で締め括らせていただきたいと思います。

各セッションは、まずそれぞれのセッションの冒頭で、お一人が10分から15分程度で問題提起、プレゼンテーションをしていただきます。そしてそれに関して、パネリストが自由に話しを進めていくというかたちにしていきたいと思います。

まず、セッション1は外務省の道上さんのプレゼンテーションから始めていきたいと思います。

道上さん、どうぞよろしく願いいたします。

**道上尚史** はい、道上です。よろしく願いします。今年6月のサッカー・ワールドカップ日韓共催の話を切り口として、日韓交流の新しい傾向や注目点をお話したいと思います。

ワールドカップといっても「今は昔」という人もいますし、「興奮してテレビを見たのがついこの前みたいだ」という方もいらっしゃると思います。

私は外交官です。国と国のよい関係を築き、その中で自国の国益を増進すること、よい国際社会形成に寄与することが仕事です。専門の一つは韓国・朝鮮でして、20年近く韓国と付き合い、向き合ってきました。日韓関係についてあまりに楽観的な人、「もう何の問題もない。時代は変わった。うまくいくよ」と言う人に対しては、「いやいや、そう甘くはないですよ」と言います。逆に「日韓は何をどうやっても、結局うまくいかないんだ」と悲観的な考え方の人には、「いや、そうでもない。いっぱい明るい面もある」と反論します。

ワールドカップについては、実にいろいろなテレビ、新聞、雑誌の報道がありました。私も、ソウルにいる日韓の知人から現場の雰囲気聞ききました。スポーツを通じ、共同開催を通じ、政治や経済という枠をはるかに越えて多くの人々の相互理解が進んだことを、うれしく思っています。ただ、「これで日韓すべてばら色だ」という人には、違和感を覚えます。あまり舞い上がったり浮かれたりしないほうがいいです。スポーツという共通言語の背後にある発想の差、互いに向けるネガティブな視線を、どこかで意識



したほうがいいと思います。その方が、付き合い方として長く続きます。日本人と韓国人は外見が似ているだけに、「同じだ、問題なし」と思いこめば、違った場合—当然、ちがうわけですが—、ショックを受け偏見に固まったりもします。誤解や感情の対立を不必要に大きくする可能性もあります。片や、一部の雑誌や識者は、「韓国は、審判はアンフェアだし、ひどかった。腹立たしい。何が日韓共催だ！」と怒っています。私は、これは否定的にすぎると考えます。

さて、私は子どものときは野球少年でして、サッカーは別に嫌いでもないけど、特に関心はなかったのです。今回、ワールドカップを連日観て初めて、サッカーというスポーツに熱狂した一人です。野球よりドラマチックで、個人技とチームプレーの組み合わせの妙があり、確かに面白いと思いました。小学生の息子2人と一緒に、中継もニュースも繰り返し観て、本当に面白いなど、生まれて初めて思いました。

## 韓国はWCで「大韓民国に熱狂」した

今回のワールドカップで日本人が何に熱狂したのでしょうか。もちろん日本の活躍がありますね。私も興奮して見たものです。次に、サッカーそれ自体への熱狂です。意外な勝利も敗北もあった。一瞬で、国対国の対決が左右される、歓喜と悲嘆に分かれる。ドラマチックなサッカーというゲームに、野球などにはない魅力に酔い、堪能したのです。第三に、ブラジル、イタリア、カメルーンでも、ドイツ、イングランド、韓国、トルコでも、多様なチームがそろった。どれも一流だけど、どれも個性的。日本の若い人は色々な国のユニフォームを着て応援した。多様性を、外国を受け入れ、愛したのです。

では、韓国はいったい何に熱中したのでしょうか。韓国に住み、言葉もできる日本人の話の聞くと、「韓国は、自分に熱中したんだ」という見方です。「強い、素晴らしいウリナラ」に感激し、酔ったというのです。「ウリナラ」というのは—韓国語をご存じの方もいらっしゃると思いますが—「わが国」ですね。「ウリ」「ナラ」、すなわち「われわれの」「国」ということです。

「サッカー自体に湧いたとか、国際親善がよかったわけでもない。日韓共同開催に感激したわけではもったない」、「強い大韓民国、ウリナラが世界で注目されることに熱狂したんだよ」というわけです。「日本人が韓国を応援してくれた」ことは、連日新聞でもテレビでも報道され、韓国の人は意外に思い、喜び、日本に親近感を持ったようです。ただ、「強い韓国が羨ましいので、日本も韓国を応援したんだと、韓国では思っていたんじゃないか」という皮肉な見方もありました。

皆さんはどう思いますか。わたしは、こういう冷静でやや皮肉な視点も、ある程度必要だと思います。ガクッとくずれやすい「バラ色の日韓観」よりは健全です。ただ、その上で言うのですが、韓国の「韓国熱中現象」はごく自然で当たり前のことじゃないかと思います。つまり彼らが、韓国が強い「ウリナラ」に熱狂すること、国際社会でここまで注目されたのは初めてという歓喜と自負心です。大観衆の「テー・ハン・ミン・グック」という叫びは、ちょっとこわいという人もいましたが、韓国が日本よりナショナルなもの、国家や民族へのこだわりが強いのは、自然なことでしょう。それで、共催相手日本のことは頭の中にない。それが残念だとか、悔しいとかいうのは、一とくに韓国の歴史、苦痛の多かった歴史を思い返せば、無理があるのではないのでしょうか。

日本は韓国を一生懸命応援している人が確かに多かったです。韓国ではもちろんそういう方もいるんですけどーふつうのアパートとかマンションとかで、日本・ベルギー戦でも、日本・トルコ戦でも、多くの韓国の人も観ている。で、日本が得点したときにはブーイングだとか、アーといったため息がもれる。それでベルギーが得点したら、ウォーという大歓声があちこちであがる。これは多くの場合事実であったようです。韓国にいる日本人として、そういうのは残念だなというのはわかるんですけども、逆に、「だから韓国はおかしい」というのもちょっと窮屈すぎると思います。

片や日本はきまじめというか、ナイーブなんですね。ナイーブというのは、あまりよくない意味ですよ。当時、韓国を勉強している学生さんが私のところにやってきました。「自分は韓国を勉強している。日韓共催だから、自分も当然韓国を応援しなければいけないと思っている。でも、僕は

もともとドイツサッカーのファンなんです。韓国でなく、心はドイツに向かってしまうんです」というわけで、それが悩みなんですね。何と純粹でまじめな学生でしょう。彼を批判するつもりはありません。むしろ彼の純粹さには頭が下がる思いです。でも私は彼に言いました。「そんなのこだわらなくていいよ。サッカーで相手のドイツを応援しても、韓国の人は君を悪いやつだとは思わないよ。韓国の人たちはそんな心の狭い人じゃないよ。のびのびと付きあえばいいよ。」

## 「日韓国民交流年」「釜山・アジア大会」

今年はワールドカップのみならず、日韓の国民交流年ということで、民間、政府がいろいろな行事をやっています。別に政府が音頭をとるまでもなく、皆さんも感じておられると思いますけど、テレビでも映画でも雑誌でも、いっぱい韓国の情報、韓国のドラマ、韓国の俳優さんが登場していますね。逆に日本の有名なタレントさんでも、演技を韓国語でやるとか、インタビューさえ韓国語でこなす若い人を、皆さんもテレビで見られたと思います。そういう分厚い、裾野の広い関係が築かれてきて、本当に心強いと思っています。

ワールドカップのすぐあとに、釜山（プサン）でアジア大会がありました。小さなエピソードを一つご紹介します。誰が動員したわけでもない韓国のおじさん、おばさんや学生さんが、日の丸の小旗を持って日本を応援してくれたそうです。昔なら政府や地方団体の提唱、動員があったかもしれない。しかし今回は自発的な、自然な現象だったそうです。隣国にごく自然な関心が日本に向けられたし、日本も韓国に自然な関心を向けてきています。

さて、このあたりでワールドカップの話題から抜けだして、日韓の付き合いを大づかみにお話しましょう。昔、濃厚な政治的関係があって、日本は政治的な立場から「韓国支持」と「韓国嫌い、韓国否定」に分かれました。より多くの方は「知らない」「無関心」「かかわりあいたくない」という姿勢でした。しかし、最近はそうではなくて、「ふつうのつきあい方」になりつつある。友達同士、お隣同士では、気持ちよくあいさつし仲良くしながら、当然、注文とか、言いたいこともあるわけですね。隣の家が

ちょっと騒いでうるさいとか、ゴミの出し方が悪いだとか、近いがゆえに気になることもある。ケンカがいいわけでもないが、すべて黙ってがまんすべし、ということでもない。

相手のいいところはしっかり見て自分も学びたいですね。片や「これ、わかってよ」「ちょっとおかしいよ」というときには、おたがいに指摘する。言われたほうもそれでキレて「何だ」と怒りをぶちまけることにはならない。つまり、相手の全部を肯定しなければいけない、支持しなければならないという「ねばならない」型でなく、肩に力の入った思い込みでなく、自由で健全な対話が始まりつつあるようです。考えてみれば、知人でも友達でも夫婦でもそうですね。そういう普通のよき隣人関係に近づきつつあるのではないかという気がしています。

## お互いの「不得意科目」に変化が

これは私が昔から使っている表現なんですけど、日本にとって、長らく韓国・朝鮮は「不得意科目」でした。隣にしながら、よく知らないし、ネガティブな否定的なイメージが強く、付き合いが下手だった。そういう意味で韓国は不得意科目でした。同時に、私も韓国に5年近く住みましたが、実は韓国にとっても日本は「不得意科目」であったと思います。韓国の場合は、逆に、「日本なんて、もう十分に知っている。自分の知っている日本が真実の日本だ。日本人がそうでない説明をしたら、それは欺瞞だ」「日韓で懸案があれば、当然、日本が譲るべきだ」という、思いこみがあった。それゆえに、日本の実際の姿をまっすぐに、合理的に見ることができない部分もあったのです。韓国も、日本との付き合い方が下手だった面がある。最近まで、「軍国主義、戦争賛美」「今も日本はアジア侵略の機会をねらっている」という、日本人が聞けば腰を抜かすような外的日本観もありました。最近は相当変わってきています。韓国の若者も日本に観光し、日本人とのインターネット通信が増えています。マスコミ、学者、NGO、行政、学生、色々なレベルで、合理的な日本観、日本を率直に見る人が増えています。

もう一つ、そろそろ締め括りに近づくんなんですけど、言葉というものがとても大事な接近の、理解の道具だと思っています。私は1983年に外務省に入っ

て、韓国に2年間留学させてもらいました。それまで私は韓国や韓国語に縁がありませんでした。やってみたらこんなに面白い、学びやすい外国語はなかったですね。韓国専門になって自分は実にラッキーだと思いますが、私はまず言葉の面白さというものから韓国と接点を持ちました。

韓国語をご存じの方もいらっしゃるでしょうが、日本語に近い言葉がいっぱいあります。もともと日本からいった言葉なんですけど、「うどん」は「ウドン」だし、「かばん」は「カバン」だし、漢字語もやっぱり似ていて、「高速道路」は「コーソクドロー」です。飛行機に乗ったら非常時に備えたアナウンスがありますが、「酸素マスク」はやっぱり「サンソマスク」なんです。日本人にとって、これだけ近い言葉、学びやすい外国語はないと思います。

日韓の学生が市民運動をテーマに討論会をやり、基本的に英語で議論していたのですが、内輪のささやきあいもある。日本側が気づいたのは、「市民運動」を韓国側は「シミンウンドン」と発音することです。「ウンドウ」と「ウンドン」の違いはありますが、「あっ、こんなに似ているのか」とうれしくなって、互いに相手の発音をまねたそうです。

最後にひと言だけ申しあげます。まだまだ政治、歴史、安保という難しい問題がたくさんあります。私は文化交流やスポーツだけで、経済的な浸透だけですべてが自動的に解決するとは思っていません。そんなに簡単なものではないとも思っています。ただ、ぜひ皆さん方学生であれ、地域の市民の交流であれ、もっともっと進めていただきたいです。得るもの、築かれるものは極めて大きいわけです。主張し、学び、自らを振り返りつつ、日本をよりひらかれた、魅力ある、強い社会にする道だと思います。

昔は、特に日本人の側から言いますと、相手から何を言われてもじっと黙って我慢し、あるいは、もう何を言っても仕方ないとあきらめたがゆえに黙っている人もいた。二種類の沈黙があった。片や、気に食わないことを言われて「うるさい」と感情を爆発させる人も最近結構いる。そういう、沈黙でも爆発でもない、建設的で対等な対話、発信というものが近年ようやく始まってきたし、これからもっと増えていくのではないかという予感があります。皆さんに期待します。

以上です。ありがとうございました。

**小倉** どうもありがとうございました。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、道上さんは韓国で、韓国語で25回も講演をなさって、しかも韓国人に対して結構「ものを申す」というタイプの外交官として有名な方です。『日本外交官、韓国奮闘記』という文春新書の著書があります。道上さんの提起に関して、ほかのパネリストの方、何かご意見ですとか、ご自分の見解ですとか、おありでしょうか。どなたでも結構ですけれども、いかがですか。

## 韓国には韓国の「文化の型」が

私がちょっとひと言申し上げたいことは、確かに日本と韓国はふつうの関係になりつつあるということだと思いますが、そのときの「ふつうの関係」というのがやはりそれぞれの文化に根ざした「ふつう」というものなんです。どういうことかと申しますと、日本人はこうだ、韓国人はこうだという民族性の議論は私はしたくないと思います。つまり日本人にも多様な方がいらっしゃいますし、韓国人にも多様な韓国人がいるわけですが、「文化の型」と言いますか、そこからなかなか出られないというものがあまして、例えば、日本人はふつうの人間関係だと、なかなか相手にものと言えないというのがあります。いまの若い人は違うのかもしれませんが、ある程度の年の人、私の感覚では30代以上の方は相手に面と向かって「あなたはここが違っているよ」と言うのはふつうの関係ではないような気がします。

ところが韓国の文化では、「ふつうの関係」と言いますと、韓国人同士でも何でも言いあうということはないと思いますけれども、日本人とやはり違うようなふつうのコミュニケーションの仕方というのがあって、「ふつう」というものの考え方がおたがいの文化のなかで違ってくるところに、ひとつポイントがあるのではないかと感じました。

ほかにはいかがでしょうか。ほかのパネリストの方はいかがですか。はい、どうぞ。饗庭さん。

**饗庭孝典** 饗庭でございます。先ほどのパネリストの紹介のなかで、いちばん若い人の紹介があったのですが、いちばん年季の入った者の紹介はなかったもので、自分で手をあげましたが、30年近く前にソウルで特派員を

やっておりました。実は私は韓国語の「か」の字も知りませんでした。ただ、それで仕事ができなかったのかと言いますと、あるところでは賞をもらったぐらいできました。なぜできたか言いますと、韓国の然るべき人たちはほとんど日本語をわかってくれたからです。ですから、電話一本かけて大臣のところへ取材に行っても、「おお、よく来た」と言って、めしを食べてもらいながら話げできたのです。そういう状況でした。

当時の特派員の3分の1くらいはペラペラでした。留学した人もいました。ところが、当時東京にいた韓国の特派員というのは、みんなもう日本語がペラペラでした。ただ、大半の人が国語として日本語を習った人、教え込まれた人だったのです。そういうことに比べると、いま東京にいる若い特派員にケチをつける意味で言うわけではありませんが、やはり、大人になってから習った日本語で、本当にうまいと思う人は数少なくなりました。そういう意味では、ノーマルな関係になったのかなという気がします。先ほどの道上さん、小倉さんの話を聞きながら感じていました。

私が特派員として赴任したときに、先輩から言われたことが一つあります。「お前は、顔もかたちも同じだと思うだろうけれども、韓国は日本と体制の違う国だということを忘れるな」と。確かに政治的には、皆さんも遠いご記憶があるかもしれませんが、いわゆる軍事独裁政権でした。日本は民主主義の国だということで体制が違う。経済的にも日本のような自由経済と違って、確かにもう貿易も極めてきつい制限がありましたし、何かと不自由を感じなかったわけではありません。特に政治、軍事、安保のからみで言いますと、例えば、初代のソウルでできた大韓民国の初代大統領のイ・スンマン（李承晩）氏が、1950年の末でしたか、朝鮮戦争の戦況が思わしくないというので、国連軍、実質はアメリカ軍ですが、日本の旧軍隊をもっていこうじゃないかという話があったそうなんですが、そのときにイ・スンマン氏が、「もしも日本軍が応援に来たら、われわれはうしろを向いて鉄砲を撃つ」と言ったそうです。まさに、安保の面でも体制の違う国であったということが言えるんだらうと思います。それがいま、政治的には両方とも議会制民主主義、経済的には資本主義、自由経済ということで体制を共有できるようになったわけです。

それで、先ほどのご紹介にありましたように、私は日韓文化交流会議の

委員として行ったり来たりして会議をやっているのですが、そういうなかで、やはり体制が同じになったなということと同時に、10月のはじめに日韓文化交流会議が「ソウル宣言」を出したのですが、そこで「われわれは体制共有まで来た。これからは意識の共有を図らなければいけない」。極端に言いますと生活意識、これはあとで詳しく話題になるのですが、だいたい浸透してきたと思いますが、これからは価値観を共有して、意識の共有ということを図らなければならないということの一つのスローガンとして打上げました。

## 体制の共有から意識の共有へ進みだした

いまの道上さんのお話を聞いていますと、ワールドカップを通じて、どこまで意識の共有化が進んだのかなという疑問が残るようなお話もありましたけれども、私は体制の違いから体制を共有する、さらに意識の共有へ向かって、このワールドカップというものが大きく一歩前に出すきっかけになった、大変よかったなと考えています。

**小倉** どうもありがとうございました。饗庭さんの風貌を拝見していますと、私は朝鮮半島の、朝鮮王朝時代のソンビと言われる学者の風貌に近い方じゃないかなと思うんですけども、もしかしたら、ほかの方がごらんになると、日本の古武士の風貌をそなえた方であるというふうにごらんになる方もいらっしゃるって、風貌というのはかなり重要な要素なんですけれども、司馬遼太郎さんの朝鮮に関する本を読んでいますと、必ず朝鮮の人、韓国の人々の風貌についての描写がかなり詳しく出ています。やはり、風貌というものがいかに日本と韓国では違うかということが書かれているのですが、最近の若い韓国人、日本人を見ていますと、風貌はあまり変わっていません。この会場にもおそらく韓国人じゃないかなと思える方もいらっしゃると思いますが、私は確信が持てません。つまり、そのように風貌が似てきている日本と韓国ですけれども、そのなかで価値観というものもかなり似てきているというのも確かなんです。

ところが、ワールドカップの韓国での応援を見ていると、日本の学生の反応は、われわれとだいぶ違うじゃないか、ふだん何がおいしいだとか、どの俳優がいいだとか、そういう話をしているときには、非常に似た共感、



感情を共有する、感覚を共有するということができるんだけれども、あのナショナリスティックな応援というものは、われわれとはだいぶちがうんじゃないかとなる。そこで初めて違いを認識するわけです。ですから、われわれの世代と若い世代というのは、ちょっと入り方が違うと思います。まず、最初におたがいに気が合ってしまったて、なかなかいいじゃないかというところから、共有のところから入って行って、つきあっていくと、違う、違いというものを見出して、なかなか入り込めないなという順序になっていくという感じがします。

いかがでしょうか。ほかのパネリストの方、何かご意見ありますでしょうか。

**金恵京** 先ほど紹介されましたとおり、私はいちばん若い人で申しわけないんですけども、私がなぜこのフォーラムに参加をしたのかと言いますと、だいたいきょういらっしゃっている方は、若い世代の人が結構多いんだと、きょう改めて感じたんですが、私は最初に個人的なことからお話します。

私は日本に来てから今年で9年目になります。20歳のときに来ました。今回のワールドカップのことを、個人的な経験からお話したいと思います。2002年のワールドカップのときは日本にいて、韓国とポーランドの初めてのゲームのときには、私は修士論文とか、いろいろな論文でテレビを観ることができませんでした。ある日突然日本人の友達から電話がかかってきて、「おめでとうございます」とか「よかったね」という電話があまりにもたくさんかかってきて、自分の国のことなのに最初は何だろうと思ったりしていたのですが、うれしかったです。

ちょうど4年前のフランス・ワールドカップのときには、韓国が勝ってもまわりの友達からは電話もなかったし、「おめでとう」もありませんでした。それは振り返ってみれば、ここ最近まではライバルの関係ではなかったからで、2002年のワールドカップのことをきっかけにして、とても若い世代の考え方とか接し方がノーマルになったからじゃないかなと思います。

面白いことなんですけれど、私が日本に来た9年くらい前のことですが、皆さんも召し上がったことがあると思いますが、キムチを母が送ってくれたときに、みんなから「これ、どういうニオイ」とか「変なニオイだけど、

これなあに」と言われたんですが、いまはキムチのにおいがすると、隣の方から「すごく好きですよ」とよく言われたりします。だから、自分から言うより、去年とかここ2、3年前からは、隣の近い友達から韓国のことを言ってくれるんです。「私はキムチは大好きですよ。焼肉も好き」とか「韓国へ行ったことがあるんだけど、ここはどう」とかということで、かなり9年前と変わったなという感じを持っています。

## ライバルになって「ノーマルな関係」に

やっぱりここ1年前からの統計をみると、日本人はハワイへ旅行する方がいままではとても多かったらしいのですが、ここ2、3年では韓国へ旅行した数がハワイへ旅行した人を上回ったということで、今年は外国旅行に行く人の数が減っているにもかかわらず、韓国へ旅行する人の数はどんどん増えているということから考えてみると、日韓関係はやさしい、ノーマルな関係になったんじゃないかなと思います。

そして、今年は日韓の国民交流年であることは皆さんもご存じだと思うんですが、1月からは新年の日韓両国首脳の挨拶があったり、日本では大学入試センター試験というのがありますが、そこで韓国語を導入する年でもあって、文化交流が活性化されたり、外務省で日韓文化交流の準備室をつくったり、国際交流基金では日韓文化交流の連絡室をつくったりして、今年はとても活発な運動なり、行事が行われることを感じています。

最初日本に来て、私が韓国語で話をしながら道を歩いていたら、変な目で見られたんですね。日本人の顔をしているのに、急に何語が出てくるんだろうという感じで、「エエッ？」という顔をしてたんですが、去年、今年、サッカーをきっかけとして、歩いて韓国語をしゃべったりしたら、「韓国から来たんですか」とか、好奇心を持った目で見られるということを感じましたので、とってもサッカーはいい「感染源」だと見ればいいのかかなと思います。

また、アジアでは初の日韓共同開催で、共同でやるのが初めてで、日韓関係だけでなく世界から見れば、国際社会のなかではとても大事なサッカーだったので、それを基準として私は大成功だったのではないかなと思っています。個人的な話も含めて話しをしましたので、ほかの方、サッ

カーに関する日本人の方のご意見なども聞きたいんですけども。

**小倉** いかがですか？ サッカーはよかったと思いますね。ただ、サッカーというのがだいぶわれわれの意識のなかで、ずいぶん遠くのものになってしまっているということも事実で、あれが今年のことだったのかというふうな意識もあるんですね。それだけふつうになったのかもしれませんが。特別なイベントがあって、そのためには盛り上がりたててはいけないということではなくて、日韓というのはそれだけふつうになってきたということかもしれませんし、もう一つ今年の秋に、それを超えるような、「超える」といったら語弊がありますが、それよりも大きな問題が日本と朝鮮半島のあいだに起きたので、それがいま非常にビビッドなかたちで進行しているということで、6月のサッカーの盛り上がり、あるいはその共感体の構築と言うのでしょうか、そういうものが薄らいでしまったということもあると思うんですね。日韓がこれだけふつうになって、いい関係になっていると同時に、日本と北朝鮮との関係が非常に鮮明な対立として、対立的な構造としてクローズアップされてきたということもあると思いますが、その点はいかがでしょう。

## 日韓はバラ色だが「北朝鮮」理解も必要

**高崎宗司** 道上さんの最初のお話では、バラ色だけではないということでしたが、いままでのお話をきいていると、やっぱりバラ色という感じですよね。実際僕自身も1973年に朝鮮語の勉強を始めてから来年で30年になるわけですけども、ずいぶん変わったなという感じがありますね。

私の身近なところで、バラ色の方向につながりそうな話題として2つほどありますが、一つは僕の4年生のゼミが卒業旅行で韓国の京畿道抱川郡に行くということで、みんなで自然にまとまったということです。

それから、私がいま住んでいるところが、山梨県の北巨摩郡長坂町という田舎なんですけど、その隣町の高根町というところが韓国と姉妹提携をしようということで、今年は前倒しで韓国から高校生と中学生を10人招待してホームステイをさせているというようなことがあるんですね。そういう意味で、非常に日韓の交流が盛んになって、かつての外交官の交流から文字通り民間の交流になってきているというふうに思います。

資料によりますと、韓国からの入国者が134万人、日本から韓国に行っている方が今年の前半だけで123万人、だいたい最近は両方合わせると365万人くらいは行き来している。2泊3日で行っていることにすれば、1日3万人くらいが日本か韓国かにおたがい行き来しているという数字になっているんですね。おそらく皆さんのなかにも韓国に行ったことのある人が大半なんじゃないかと思います。ちょっと手をあげてみていただけますか、韓国に行ったことに行ったことがある方。はい、ありがとうございます。だいたい6割がたですかね。そういう状態だと思います。

しかし問題は、いまの北朝鮮ですね。北朝鮮へ行ったことのある方、何人いますか。手をあげてみていただけますか？ 1、2、3人、はい、ありがとうございます。だいたいいま100人ぐらいいると思いますが、北朝鮮へ行ったことのある方はそのぐらいですね。非常に少ない。いまどのくらいいるかよくわかりませんが、日韓の往復がだいたい365万人とすると、その0.1%、3,650人も行ってないんじゃないかと思いますね。このように北朝鮮とのあいだには全然交流がないんですね。ですから、特に若い方に私はお願いしたいんですが、韓国について興味を持ちはじめたばかりの方にはちょっと酷な注文ですけど、これからは北朝鮮に関心を持って、北朝鮮との関係をどういうふうにしたらよくできるのか、まず手始めに北朝鮮を理解する。どういうふう理解するかいろいろあると思いますけど、まずとにかく北朝鮮は僕も4度行ったことがありますけど、個人的な友達というのはつくれるような状況じゃないです。行ってもそういうふうな状況じゃありません。そういうふうな状況をどうしたら打破できるのか僕もよくわかりませんが、ですから、問題提起ということになるんですけど、とにかくわからないなりに、どういうふうな国なのかを理解して、向こうにも理解してもらうようなことを考えていくことが、これから非常に大事なのではないかというふうに思います。

**小倉** やはり日本と韓国の関係というものが非常によくなくなってきている。歴史認識問題というのがあとで出てきますけど、そういうものを引きずりながらおたがいに隣の国ですので、すべて仲良くというわけにはいきません。先ほどライバルからノーマルな関係にという話が出ましたけれども、やはりお隣の国ですからライバル的な関係というものを完全に解消し

て仲良しという、そういうわけにはいかないわけで、そういうことは引き続いていくわけですけども。それとはもう一つまったくわれわれの関心の対象外であった北朝鮮が、この1990年代の中頃から急速にわれわれの意識のなかに出てきたというところをどうやって整理するかということが、非常に重要な問題としてきょうも話し合われると思いますけれども。

李さん、いかがですか、この件に関してでなくても、日韓について。

## 「日本応援しないと非国民」の雰囲気

**李敬宰** ワールドカップの話がこの6月ぐらいにありましたので、よく聞かれたんですけど、正直言って私にはよくわかりません。ワールドカップが、私はきょう大阪のほうからやってきたんですけども、大阪の高槻という小さな、人口35万人ぐらいの町ですけども、そこでワールドカップがかなり盛り上がったというふうには、あまり実感できなかったんです。東京あたりでしたら相当いろんな人たちが大騒ぎしてたなあというふうに思うんですけども。テレビのなかに出てくるそれに少しは影響されて、なんかワールドカップで自分自身も盛り上がらなあかんのかなあ、その割にはなかなか盛り上がれへんなあと、世間に取り残されてるなあとか言ってちょっと心配をしてるんです。

ただ私の子どもが学校のなかで、もちろんイ・キョンジェという私の娘はイ・リファという名前なんですけど、本名で日本の学校へ通っているわけです。ワールドカップのときに、あるやんちゃな日本人の子でしょう、日本を応援しないやつは非国民だとか言ったわけです。そんなに深い意味があってその子どもが言っているとは思わないですけども、そういう子どものうちからそういう思考してしまうという、親がたぶん教えている、親がそう叫んだんと違うのかな。子どもがそれを小耳にはさんで学校で言うたんやろうと思うんですけど、そういう雰囲気もやっぱりこのなかにあったんじゃないかなあということを、少し皆さんも留めておいてほしいなと思うんです。

サッカーの門外漢の私からすると韓国の騒ぎようも異常でしたし、日本の騒ぎようも異常だった。両方とも異常やと思うんです。先ほど道上さんのほうが爆発だとか、あるいは片や沈黙でなくて対話というのが大事な

じゃないかなというふうなことをおっしゃったんですけど、あのワールドカップは爆発か沈黙かしかなかったんじゃないか。そういう意味ではあそこは一つの通過点として、今後スポーツを通して私はあんまり対話ができるとは思ってないんですけども、対話に向かってやっていかなければならないんじゃないかなあという、ちょっと優等生的な締めくくりでしたかね、それで終わりたいと思います。

**小倉** この日韓のワールドカップをめぐる今年の問題をどういうふうに評価して整理するかという問題は、日本人、韓国人のすべての人が心のなかでやるべき問題だというふうに思います。誰かがこうだったというので、それに賛同するということはもちろんないと思います。このテーマはもう時間になってきましたので、ここで終わらせていただいて、セッション2のほうに入りたいと思います。

セッション2のほうは一気に歴史認識問題、教科書問題こういう非常に硬いお話に入らせていただきたいと思いますと思うんですけども、このセッション2の前半部分は高崎さんに問題提起をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

## セッション2

**高崎** 教科書問題と、私自身がいま運営審議委員をやっているアジア女性基金との関係で「慰安婦問題」を中心にお話しをしたいと思います。まず教科書問題というのは1982年、比較的最近では去年ありましたけれど、大きなものとしては82年の教科書問題というのは、今では教科書に載るくらい大きな問題としてあったわけです。日本の教科書が侵略を進出というふうに文部省によって書き換えられてる。そのこと自体は誤報、誤った情報であったわけですけども、しかしそこで指摘されるような教科書をめぐる状況というのは確かにあったわけです。韓国ではそれ以前から日本の教科書が韓国侵略について詳しく書いていないということで批判をしていましたし、それともう一つ大事なことは、そのときなぜ大きな問題になっ

たかということ、日本の大臣が2人、そういうことについて韓国がいろいろ言うのは内政干渉だと言って、そのことがむしろ大きな反発を招いたというふうなことがあったと思います。それでその問題が82年の夏中、ずいぶん新聞を賑わせたわけですが、一応、近隣条項といわれる検定の心構えみたいなものが政府によってつくられて、近隣の諸国、韓国、中国等について日本との歴史の関係については教科書でできるだけ配慮して書くというふうなことで一応一段落したわけです。

その後のことをちょっと考えてみますと、私が関係した日韓歴史教科書研究会という組織があるのですが、これは韓国の方が日本の学者に、ドイツとポーランドがやっているような教科書をめぐる対話をして、共同で副読本をつくるようなことをやろうという提案をして、日韓双方、20-30人ぐらいずつ集まって91年から92年にかけて4回ほど合同の研究会をやった。その間それぞれの国では毎月のように研究会を行っていたわけですが、その研究会、いまから見るとやはりその当時の日韓関係を非常によく反映してるなというふうに思います。どういうことかと言いますと、まずその研究会が開かれたのが91年、92年だということです。教科書問題が起きてから約10年経っているんです。つまり82年当時は、そういう教科書問題について日本と韓国の学者が自由に話し合うという、そういう雰囲気は全然なかったんです。いまはたくさんそういう組織があると思います。

それから2つ目の特色は、その研究会では日本の教科書と韓国の歴史教科書と両方問題にしようということで始まったんです。だけど結果的に研究会で行われたのは、だいたい95%日本の教科書についての議論です。わずかに5%ぐらい韓国の教科書についても議論がなされたんですけど、理由はなぜだと思いますか。韓国側の研究会参加者はみんな日本語が達者だったんです、ですから日本の教科書を読めて、日本側の参加者は韓国語が読めない。日本でももちろん韓国の教科書の翻訳はあったわけですけど、やっぱり翻訳に頼って議論をするっていうのではと、みんな思ったわけです。だから結果的にできなかった。ちなみに日本側でその当時韓国語が自由に読み書きできる人は1人でした。その後その研究会の中から3人の方が韓国に留学して、その後は韓国語も達者になっていますけれども、90年代のはじめというのは、だいたいそういう状況だったということです。

## 「朝鮮史」の教え方も変化

それから、3つ目の特色は教科書問題を議論するなかで、どうしても日本植民地統治の時代のことが問題になるわけです。そして韓国側からいろいろ言われるわけですが、日本の研究者のなかから日本の歴史教科書というのが朝鮮をどういうふうに描いてきたのかというふうな報告があって、それに基づく問題提起もなされたことがあるんです。これはこういうことです。大雑把に言いますと、日本の小学校や中学校で朝鮮の歴史を教えている先生方は、昔は日本は朝鮮でひどいことをしたというのを教えていた。そうしたら子どもたちが朝鮮人はやられてばかりいたのかというふうな印象を非常に強く持つので、これではまずいというので、いや朝鮮人は抵抗したというふうなことを教えた。だけどそれだけでもやっぱり自分たちとは関係ないなあというふうに子どもたちが思っている。どうしたらいいかというので、いや日本と朝鮮のあいだには朝鮮を理解しようとした日本人もいた、例えば民芸という言葉の創始者である柳宗悦です。ああいうふうな人がいて、日本植民地統治時代にも朝鮮のことを理解して、朝鮮のいいところを日本に紹介した人もいるんだということを教えるようになって、それで子どもたちは、ああそういう人もいたのか、日本人も悪い人ばかりではない。自分たちもそういうふうな人のあとを継ぐようにしようと思うようになったというふうなことを日本の先生が韓国の人にお話ししたわけです。

日本ではこういうふうに朝鮮史の教え方が変わってきています。われわれとしても韓国の教科書にそういう、言ってみればいい日本人がいたことを書いてほしい。日本の明治末期の社会主義者たちは、それなりに朝鮮の独立が失われるときに抗議をしたし、大正デモクラシーの時代に柳宗悦のような人が朝鮮の美術工芸を紹介した。そういうことを韓国でも教えてもらったら、韓国人の日本に対する感情というのも少し変わるのではないかな。おたがいがおたがいのいいところ悪いところを、いわば全体的に見ることができるのではないかな、そういう問題提起をしたんです。

ところが、それについてどういうふうな反応があったかという、そういう人はごく一部に過ぎないという。そういう人たちのことを強調することは、やはり日本の植民地支配のひどさを相対化するものだ。あるいはそ



れでもって帳消しにしようとしているのではないかというふうに、少なくとも韓国では受け取られる。そういうことを韓国の教科書で取り入れることは絶対にできないというふうな話で、報告自体に対してもあまり関心を持った様子がなかったですね。そういうかたちで1982年の教科書問題というのがあったように思います。

## 日韓共通の歴史副読本の動きも

しかし最近はどうかと言いますと、日本と韓国で共同の歴史副読本をつくらうというふうな動きは、例えば東京学芸大の方、あるいは東海大の先生でもそういう方がいますが、いくつかそういう動きがここ数年あって、たぶん来年あたり、少なくとも3、4冊、そういう共同の研究成果に基づく副読本ができると思うんですけども、そういうふうに歴史認識でずいぶん共通な面が拡大してきたと言うか、一緒に副読本が書けるようなところまできたというのは非常に大きな変化なんではないかと思えます。

去年も歴史教科書問題があったわけですが、あのときも新しい歴史教科書をつくる会が問題なんであって、もちろんその教科書を認めた文部省、政府も問題だけれどもという意見はありましたけれど、あれは日本全体がそういう教科書をいいとしているわけではないという、そういう認識はずいぶん広がったように思います。そういう意味でも僕は歴史教科書問題についても、また非常に楽観しているところがあります。

もう一つ1990年代に「慰安婦問題」が起こったわけですが、いわゆるこの「慰安婦問題」について私が思うことは、歴史学者として、あるいは日本と朝鮮の関係を勉強してる者として思うことは次のようなことです。

一つは「慰安婦問題」がなぜこじれたかということのうちの一つに、「慰安婦問題」をめぐる歴史認識の違いと言いますか、あるいは歴史認識そのものが非常に日韓ともに足りなかったということがあると思うんです。それは具体的に言いますと、いわゆる挺身隊の問題、それから日韓条約でこういった補償問題が解決したのかどうかという問題です。

挺身隊の問題というのはどういうことかと言いますと、正確に言いますと半島女子勤労挺身隊というのが当時つくられたんです。これは名前どおり勤労挺身隊なんです。だけど韓国ではこれをいわゆる「慰安婦」という

ふう理解をしたために、小学生5年、6年の子どもが日本に連れて行かれて「慰安婦」にさせられたとした。勤労挺身隊が韓国に帰ってきた写真を、彼女たちは何も知らないで、これから「慰安婦」になるということも知らないで笑っているというふうなキャプションをつけて、勤労挺身隊が帰ってきたときの写真を紹介するというようなことがあったんです。やはりこれは勤労挺身隊についての研究がなかったために、そういう問題が起きたと僕は思います。

## 「慰安婦」・戦後補償問題の研究不足

もう一つ大きな争点になったのが、日韓条約でもって補償問題が解決したのかどうかという問題です。これは解決したという人と、しないという人がいたわけですけど、実際に日韓条約でどういうふう to これらの問題が扱われていたのかということについて十分な研究はなされていなかったと思います。いまもされていないと思います。日韓条約で「慰安婦問題」は議論されてなかったんだから解決するはずがないというふうに言う人が多かったですけど、じゃあその方が日韓条約の議事録をきちっと見たかと言ったら、実は誰も見ていません。だいたいそういう状況なんです。実はこれは人を批判するためではなくて、自己批判として、自分の反省として述べているわけですが、その反省というのはこういうことです。

つまり歴史家がもっと「慰安婦問題」について早く論文を書いていたら、挺身隊問題などについて早く論文を書いていたら、あるいは日韓条約について補償問題がどういうふうになったかをもっと早く調べて論文を書いていて、しかもそれが日本でも韓国でもたくさんの人に読まれていたら、「慰安婦問題」はこんなにこじれなかっただろう。そういうことです。そういう点でこの「慰安婦問題」というのは、いまも課題として残されたままになっている、いま言ったような面からみても。いくつかの間、論文は出ましたけれども、みんなが納得するような論文は率直に言って出なかったように思います。「慰安婦問題」については本当にたくさんの方が書かれました。しかし、説得的にみんなの意見を一つの方向に集約するようなかたちでののはたらきというのは、それらの本にはならなかったというふう to 思うんです。これは先ほども言いましたように、繰り返して言いますと、歴

史家の責任でありますけれど、これから若い人がそういう問題に取り組んで、それからいま現在は問題になっていないけれど、これから問題になりそうなことについては、やはり若い研究者がそういうテーマについて研究しておくことが非常に重要なのではないかと思います。

今後の問題として最後にお話ししたいのは、北朝鮮との問題です。北朝鮮は賠償補償を要求していたのだが、結局それを放棄して日韓方式と言いますか、経済協力方式\*になったわけですが、しかし日韓方式でやりますと「慰安婦問題」、それから被爆者の問題等は結局また曖昧な問題になります。被爆者問題、「慰安婦問題」というのは日韓条約のときに曖昧に処理したために問題として残って、われわれアジア女性基金に関係した者は苦勞したわけです。これもいま、日本政府と北朝鮮政府のあいだできちっと解決をしないと、また大きな問題になるということです。

それから、北朝鮮の場合は韓国以上に歴史観が硬直していると言うか、多様性がありませんから、北朝鮮では強制連行600万人、「慰安婦」20万人というようなことをずっと言い続けています。その数字が確かなものかどうかということについて、北朝鮮の学者と日本の学者が議論をたたかわせるというふうな機会はいまのところないわけです。いまからでもそういう議論をして、あまり検証されてない数字をめぐって不毛な議論が行われるというふうなことは、やはり避けるべきではないか。そのためにも、もちろん外務省にも頑張っていたいただかなければいけないんですけれども、学者がもっとそういう問題について、学問的に議論しておくことが、あるいはしていくことが非常に必要なのではないかと。まだ日本ではそういうふうなことを考えている人が少ないので、若い方にぜひ期待して私の問題提起にしたいと思います。

**小倉** ありがとうございます。先日ドイツと日本の戦後補償について研究されている方のお話を聞いたんですけれども、やはりドイツと日本の明らか違いは、ドイツの場合は歴史家が非常にきちっと研究をして、しかもその歴史家の研究というものが非常によく現実の政策と言いますか、そういうもの、あるいは世論というものに反映されている。ところが日本の場合は、そういうことがほとんどなされていないで、マスコミ主導になってしまっているということが大きな違いだということをおっしゃって

#### \* 経済協力方式

日韓復交で賠償や個人補償方式はとらず復交後日本からの経済協力によって一括処理。北朝鮮との間でも2002年9月17日「平壤宣言」で同方式をとる旨合意。

ました。この非常に核心に入った部分ですけれども、何かご意見ございませうでしょうか。どうぞ、道上さん。

**道上** 短く4点、コメントを申し上げます。主に歴史問題についてです。一つ目は学者への注文です。高崎先生がおられる前ですけど、日本の歴史学者は、非常に緻密な研究をされること自体はいいんですけど、どうも韓国の学者を見下す傾向があった。韓国の歴史研究ははじめから結論ありきで、政治的で、ナショナリズムでという思い込みがあり、対話や議論を避けてきた。韓国にはそういう方もいるんですが、カチッとした研究をしている、問題意識のある立派な研究者もいるわけです。食わず嫌いをせず、互いに異質な発想に接し、切磋琢磨し、視野を広げていただきたい。学問的な、かつ人間的な交流を何倍も何十倍も深めてほしいと、心の底から思います。

第二に、日本人全体が——学生も年配の方も含めて、歴史というものを大切に考えてほしい。私は外務省で日韓関係の担当をしていて、やはり根っここのところには歴史問題がある。まだ20代のときですけど、サハリン残留韓国・朝鮮人問題という「過去」関連の問題で国が訴えられて裁判になったんです。政府が被告で、私は政府側、被告として法廷に立つわけです。法的には日韓間の条約で解決してるという主張をするし、でもその後も、財政措置を含め政府は人道的観点からできるだけの措置をしているという説明をします。実際、その後再会、帰国は随分進み、やりがいがありました。

## 「歴史を知らない」ことはためにならない

でも、私がいいたいのは、植民地支配の過程であれ、その前の日清日露は、朝鮮をめぐる朝鮮での争いであったことであれ、日本人が基礎的なことをもっと知った方がいいということです。相手側が言うからではなく、日本は自分の歩んだ道を知らなくていいかという、根源的な問いです。普通の日本人が知らないこんな事実があったんだ、それは今も多くの韓国の方々には重い大きな問題である、厳しい日本観の最大の原因になっているということです。自分の歩んだ道—明暗色々あるのは当然です—を知らないのは、直視しないのは、日本のためにならないと思います。日本はそんな

に情けない国でもなかろうと思います。ちょっと居心地の悪い批判めいたことを言われると、キョロキョロしたり、うるさいと居直ったりするのは、日本のあるべき姿ではない。議論はいくらもすべきですが、自らの歴史を、長所も問題点も、逃げずにしっかり把握することがきわめて大事です。日本の近代史は、韓国もアメリカもイギリスも関心を持って、聞いてきます。国際社会で日本人が立ち往生せず、逃げ隠れもせず爆発もせず、一人一人が対話、発信できるようでありたい。

第三に、韓国の歴史観、日本観に対して言いたいこともいっぱいあり、実際言ってきました。例えば教科書検定。検定に受かった教科書の記述そのものが政府の歴史認識でないということです。つまり韓国は、ご承知の方も多いでしょうが、実質的には、一つの国定教科書でもって歴史を学校で教え込む。「正しい歴史」は一つであるというような、権威主義的な、つねに国家と民族の文脈でとらえる性格が強い。マスコミも学者も、そういう前提で、日本の教科書検定もそうであろうという思い込みで書いている。日本はむしろ、学問の自由、教育の自由を尊重し、歴史を、教科書を、国との緊張関係を把握します。リベラルな人ほど、ゆるやかな検定ないし検定廃止を求める。韓国では、日本のリベラルと同じ方向の人が、「日本は検定を強化せよ」という方向。日本批判が的外れになる傾向がまだ強い。

靖国神社もそうです。靖国に祀られている人々はすべて侵略者であって、そこにお参りするような人は戦争賛美で、あしき軍国主義者だというような乱暴な思い込みがある。さすがに最近は減ったと言いつつ、ものすごくシンプルな誤解や理解不足がまだ多いのです。これは政府もさることながら、むしろ日本の学者や文化人、マスコミの積年の怠慢が大きいと思います。ちゃんと知ることは知りつつ、違うことは違うと発信し説明することが必要です。うつむいて黙っているだけというのはいけません。それは、相手を尊重することでもないので。

最後に、北朝鮮の話が出たのですが、私は98年、テポドンが日本列島を越えて飛んできたときソウルにいました。そのときに感じたことですが、韓国は日本と違って戦争も経験したし、安全保障、セキュリティの意識が非常に強い国で、男はいまも徴兵にとられます。それゆえに——ちょっと皮肉な現象ですけど——人の命に、人道問題に、ちょっと鈍いところが

ある。

例えば韓国の軍の演習で、漁業をやっている人が巻き込まれて死んだというような記事は、ものすごく小さな記事にしかならない。ミサイルが飛んできて日本はもちろん大騒ぎなわけですけど、「何言ってるんだ、韓国は昔から北のミサイルの射程範囲に入ってる。戦争もあった、テロもあった。なんで日本はこのくらいで騒ぐのかわからない」という反応が出てくる。拉致問題というのは当時も日本では大きな関心事でしたが、「何人かの命のことで日本は何をがたがた言ってるのか」という——もちろん韓国政府の見解ではないのですが——心情が、一部にある。相手が日本だからという面もあるかもしれない。私はこれにも、及ばずながらたしなめ、きちんと発信してきたつもりです。

ひょっとしたら韓国のこういう傾向の延長線上に北朝鮮があるのではないか。つまり北朝鮮は今でも戦争体制を取っている国で、国家安保が切実な問題であって、外国から、日本から、人命や人道問題を言われてもピンとこなかったり、敏感でない人がいるのではないか。日本政府が懸命に汗をかいているのは、ご存じのとおりです。

## 政府公式に歴史認識と国民の認識、バラバラでは

**李敬宰** 私は歴史だとか教科書だとかの専門家ではなくて、高槻のほうで市民運動をやってるもんですから、別に道上さんを訴えたりしてないですけれども（笑い）。例えば日本の政府が95年に村山総理が談話を出されて、「植民地支配」とか「侵略」という言葉をおつかいになったわけですけども、それを例えば高槻で市民運動をやってまして95年の戦後50周年のときに地域の戦跡に銘板をつくらうということになったんです。これは大阪府のお金でつくるんですけど。その銘板にどういう文言を刻むのかということで、そこにはなんとしても「侵略」という言葉は刻めなかった。その理由が、国民的とか、府民的合意がないからというんです。片や日本の政府のほうは侵略というふうに言っている。政府の歴史認識、あるいは国民の歴史認識が、この国には歴史の認識の仕方がいったい何個あるのかな、1億2000万通りぐらいあるのかなと思う。こういうことで例えば韓国との関係、やっていけるのかどうか非常に心配になるわけです。

もう一つ歴史教科書のことで去年、大もめにもめて、私も市民運動やっていますので、「つくる会」の教科書はよくない、反対だとかやってたんですけども、幸いと言うのか韓国からの猛烈な抗議があって、あの教科書がほとんど採用されなかった。愛媛のほうでは採用されたいですけども。ただあの陰に隠れて、いままで植民地支配だとかいうふうな歴史の記述をしっかりとやっていた教科書が、その記述が後退していくんです。確かに「つくる会」の教科書は採用が全国的には少なかったんですけども、実際、各都府県では、大阪なんかでも、本当は学校の現場の先生方が「植民地支配」という、あるいは「侵略」と書かれた教科書を使いたかった。ちょっとどこかの出版社が忘れちゃったけれども、それがいままでずっと使っていたのに使えなくなった、これはいったいなんなのかなあと、ちょっと懸念みたいなものが残ってしまうのです。このへんは日本の大きな流れから言うと、あまり大したことはないんでしょうかね、どうなんでしょうか。

## 国民のコンセンサスのない外交

**伊勢**　いま李さんがおっしゃったことで、私も非常に感じるところがあるので申し上げます。この「慰安婦問題」を扱ってしまして、日本の反対派などの動き、非常にいろんな問題がありました。基金に反対するとか、そういうことは当然いろいろな考えがありますから、それは別としまして。

私は、ずいぶん長いあいだ国連におりました。国連でのいろいろな議論のやり方というのは、まず問題があって、どうそれを解決するかということではいろんな意見がありまして、どうやって解決の方向にもっていくかということに非常に努力を払うところなんです。ですからコンセンサスということが非常に大事になる。ところが日本に帰ってきまして対立なんです。議論というのも本当に「反対・賛成」で、非常に冷戦時代の抗争がそのまままだ生きているような感じがいたしました。実際に外務省に対する非常にいろんな批判がありますけれども、国際社会で国の合意がないところで、国の立場をどうにかして説明しようという外務省のご苦勞は大変なものです。この国の合意がない、後ろ盾がないということはどんなに日本の国というものを弱くしてるかということ、これが日本国内には通じてな

いのではないかという感じがいたします。

反対、賛成はどこ国でもありますけれども、ドイツの場合はナチスというものがあつたので、悲惨な戦争と行為に関する解釈の合意が得られやすかつたという人もありますけれども、日本は非常に問題を残しております。やはりリーダーシップがあつて、基本的に日本が悪いことをした場合には、それに対しての処置を取るといふ合意は必要なのに、それがなかつたということを非常に感じます。反対派のなかには、日本で「慰安婦」はなかつたという方がおられます。「慰安婦」は売春婦であつたから、償ひの事業をする必要はない、そういう方もおられます。こういった史実に反した発言が政治家や高い教育を受けた人たちからも聞かれます。失言というよりまったく誤つた意見が政治家なりリーダーである人から出てくるたびに、日本の国の立場というものが本当に後退します。国家レベルの問題やそれらへの対応のリーダーシップがないということは、これからの日本にとって、しかも安保理常任理事国に入りたいというような日本にとっては大変な問題だと思つております。

外務省にもお願いしたいのですが、国連の場でも非常に間違つた意見とかデータが出ることがあります。「慰安婦」問題も偏見がもろに出る一つの課題だとは思ひます。例に取りますと20万人の「慰安婦」といふ方たちがいたと国連の報告書に書かれたのですけれども、この20万人といふのは確とした証拠がないまま使われております。こういうことはその場その場でなるべく外務省から、すぐにきつちりと説明をして早く対応をしていただかないと問題を混乱させます。国連のデータといふのは皆さんが信頼してしまうものですから、一つ一つの対応といふのをやつていただく必要があります。

もう一つは外務省がどうも国民にあまり説明をしない。国際問題の情報はほとんど全部マスコミ、二次的媒体を通じて来ます。国連でいまこういうことがある、国連はいま日本にこういうことを勧告したというようなことを、もっと日本の国民にできるだけ直接に伝えてほしい。国際化といふのはそういうところが大事なのではないかと思ひます。ただ、外務省の方たちにしても20万人の「慰安婦」がいたと急に会議場でも出されても、じゃあ20万人、これはどういう意味なのだといふような研究がなければ反論



もできない。加えて申し上げますと、北朝鮮が「慰安婦」問題で日本を攻撃しているのですけれども、北朝鮮の「慰安婦」は20万人いたという。すると北京で会議があると、中国人20万人の「慰安婦」がいたということになると20万が40万になり、それが60万になっていくということにつながる。誇張がさらに拡大して大虐殺があったというような結論に国際世論のなかでなってしまう。こういうことをもっと日本の国民にもわかっていただき、一つ一つを丁寧に訂正する、解決する、そこにまた外交という外務省の大変なお役目があるのではないかなという感じがいたします。

**小倉** 饗庭さん、いかがですか。

**饗庭** いまのお話を聞いていて、たまたまここが上智大学なので思い出したんですが、20世紀のはじめにヴァチカンがカトリックの近代化ということを議論したときに、当時の235代でしたか教皇レオ十三世というのがヴァチカンの図書館を開放しようということを言ったそうです。それは「神はわれわれの嘘を必要としていない。真実を語ればみんなに神様はわかってもらえるはずだ」と。「われわれが、ああだこうだやることを神様は必要としていない」というのが彼の説明だったのですが。私もアジアの各地を中心に特派員をずっと続けてほとんど日本の政治を知らないんですが、回ってきて感じたのは、アジアの過去というものをいちばん知らないで幸せなのは、われわれ日本人だったのかなという感じがしておりました。

先ほど私の風貌が取り上げられましたけども、実は韓国のプヨ（扶余）の博物館長をされたホン・サジョン先生という方、もうお亡くなりになりましたが、私の顔を見て、「あなたシラ（新羅）じゃないよ、ペクチェ（百濟）だよ」と言うのですね。これは面白いことだと思ったんです。この人は日本人というのはみんな朝鮮半島の子孫だと思ってるんだなと思ったわけですね、一つには、あなたはシラじゃなくてペクチェ（百濟）だよとおっしゃった。私は非常にうれしかったです。なぜかというとそのちょっと前に百濟義恵王の何十代目かの子孫だと言われている方、ソ・ギオンとおっしゃいましたけど、その方とお会いしたときに、その方の顔というのはまさに卵に目鼻なんです。男性ですよ。私が子どものときに朝鮮貴族というのは卵に目鼻、どういうわけかそういうことを聞かされたことがあるんです。ああそうかこれがあれなんだと書いていたときに、あなたはペク

チェだよと言われたんで、ああそうか私もそんな高貴な顔をしている。それを小倉先生が証言してくださったわけですけど。

## 韓国、中国の歴史感覚との違いを知る

実は私の名前は、ちょっと珍しい名前で、(先祖を) かなりさかのぼれるんだそうです。ある研究者によると、どこまであてになるかわからないんですが、私どもの家系図があったのだそうです。それは源三位頼政に発すると。清和源氏です。というようなことを言われて私、字引を引いてみたら、その人は1180年ころに実在した人なんです。ですから饗庭家というのは12世紀まではさかのぼれる。日本でいまいちばんさかのぼれる家系といたら天皇家だと思うのですが、天皇家でも5世紀までさかのぼるとあいまいになってくるわけです。それがいまある種のタブーとして残っている部分があるわけで、それが歴史解明についても障害の一つになっているのでしょ、私はそう感じてるんです。確かに天皇家のプライバシーに関わる部分もあるのかもしれませんが、たぶんわれわれの歴史というのは嘘を必要としていないだろうという意味で、歴史追究というのはどんどんやってほしい、高崎先生の頑張りをお願いしたいんです。

ちょっと前に陳舜臣さんという作家のお話を聞いてましたときに、私の家は国としての陳が滅びたときに揚子江近くに来たんですよということをおっしゃっていた。その陳というのは秦の始皇帝に滅ぼされたあの時代の陳ですから、紀元前3世紀ぐらいの話なんです。彼は淡々と私の家はそのときに故国を離れて南へ下がってきたんですよとおっしゃっていた。紀元前3世紀といたら弥生時代ですよ。弥生時代に私どもの祖先がどこにどういう生活をしていたかなあと想像する人はまずいないんじゃないかと思うんです。ところがお隣の韓国とか中国には、そういう歴史感覚が残っている。いま申し上げました義恵王何代目かのソさんというのは、朝鮮戦争のときにリヤカーに自分の族譜、系統図だけを積んで釜山に逃げた。戦争が終わってまた扶余に帰ってこられたんですが、そんな立派なうちじゃありません、普通の農家なんです、そこにちょっと大型の茶箆筒があってそれだけが家財道具って感じでしたけど、そこに族譜が納まっていました。ですから、私は韓国勤務で感じたことの一つは、歴史そのもの、歴

史というものに対する感覚、高崎先生が提起されたような意味とはちょっと違うんですけど、そういう歴史感覚というものが違う。こういう人たちとつきあうには、やはりそれへの配慮と言いましょか、それも必要なんだろうなと、われわれを常に基準にしちゃあいかんなという記憶があることをお伝えします。

**小倉** そうですね。まさに歴史というもの、漢字の言葉ですけども、この言葉を共通につかひながら、日本と韓国でその中身が違っているという話は、実は次のセッションでじっくりやりたいというふうに思っているんですけども、キムさんいかがですか。最後に簡単に。

## 韓国は反日感情、歴史認識の「差」は問題

**金恵京** 私は日本の国会でちょっと働いたことがあって、とても短かったんですけども、「慰安婦問題」といった話をすれば、国会や政府は語ろうとしないんですね。それでやっぱり日本は「慰安婦問題」とか歴史問題に対する偏見がともあるということを感じたんです。やっぱりいちばん直さなければいけないのは、おたがいの歴史認識なんですね。どういう過去があって、どういう歴史があってというよりは、いままで長く繰り返し繰り返し闘ったりして話をしたんですけども、結論は出ないというのは、歴史認識の違うこと、「差」だと思っんですね。

韓国人の場合は、どうしても感情に走りやすいタイプ、気持ちを持っているんですね。韓国人は、もし靖国神社参拝のこととか、過去の中学教科書問題が出ると、とても感情的になって反日感情が出てしまいます。でも、それだけじゃ両国間を悪化させてしまうという結果しか出ないんですね。ですから、韓国の場合には反日感情をあまり出さずに、もうちょっと日本の過去史に対する認識を改善する問題意識を持つべきだと思います。また日本の場合は、過去の歴史を看過してしまうという傾向があって、そうすると国際社会のなかで孤立化するし、日本は国際社会から先進国としての体面を失ってしまうこともありますので、おたがいの歴史認識を改善するべきだということを私は最後に話したいと思っています。

**小倉** どうもありがとうございました。これで前半の部分、セッションの1と、2の前半を終わらせることにします。5分間くらい休憩をして、後

半の部分を始めたいと思います。

【休憩】

小倉 時間になりましたので、後半部分を始めたいと思います。後半部分はまず前半の先ほどのお話しした歴史問題のつづきから始めたいと思います。歴史問題と言っても主に歴史認識の問題ですね。歴史認識とはいったい何なのか、どうあるべきなのかというようなお話だと思います。まず、この部分は私がちょっと話しをしたいと思います。

### 「歴史認識」—「自由」と「帳消し」「相殺」論

いままで、前半部分の話からもだいぶ浮かび上がってきたと思うんですけども、やはりこれは日韓だけではないですが、日韓のあいだで歴史の問題を話しているときに、どうしても引っ掛かってくるキーワードがいくつかあります。それは何かと言いますと、例えば「自由」という問題です。われわれは空気として自由というものを享受していると日本人は思っています。ところが、この歴史問題を突きつけられてしまうと、その自由というものが何なのかということを考えざるを得ないわけです。歴史問題についても、つまり歴史認識も個々人の自由であると基本的には思うわけです。「従軍慰安婦」についてどう思うか、歴史教科書についてどう思うかということは個人の自由に委ねられている、そういう問題だと思うのですが、やはり先ほどのお話を聞いていますと、国益というものを優先すべきであるのか、つまり日本という国のためには歴史観というものを、ある程度統一しなければならぬのかという問題をわれわれは突きつけられるわけです。

それから、もっといろいろな場面で自由というものが出てきます。例えば北朝鮮の問題でも、われわれが北朝鮮から帰国された5人の方に、自由意思を認めたい。つまり自由意思で、彼らの自由意思でこの日本に留まるのか、あるいは北朝鮮に帰国するのを考えてほしいと言う人がかなりいます。つまり、その議論の前提として、日本は自由意思が認められている

国なんだということがあると思います。ところがご承知のとおり、北朝鮮には自由意思という概念は成立し得ない国ですので、彼らにそういうことを求めても難しいのかもしれないし、ましてや北朝鮮に残してきた5人の家族が自由意思でどうこうする、自分の行動や発言を決めるということは非常に難しいでしょう。ですから、その自由というものが果たしてわれわれが自由のもっとない、より少ない人たちに自由というものは素晴らしいものなんだということが説得できる、あるいは説教できるような立場にあるのかどうかということも実は疑問ですけれども、自由のある国が自由のない国よりも果たして素晴らしいのかというような議論も、この10年間、あるいはもっと言えば、5、6年のあいだに日本の社会で非常に広範に議論されているところだと思います。

例えば歴史認識でも、日本人は統一しなくてはいけないというような話が出ると、これはやはり自由を制限するという部分に入ってきますので、そういう自由という問題が一つあると思います。それからもう一つは、「帳消し」というものが一つのキーワードとして急速に浮上しています。

これは歴史認識問題においてもずっとあったことです。先ほど高崎さんがおっしゃったように、「植民地時代にも、いい日本人もいた」と。高崎さんの有名なご著書に、浅川巧という人を描いた『朝鮮の土になった日本人』という本があります。この浅川巧という人は、いま非常に日本で人気のある方で、朝鮮の陶芸などを再発見して、柳宗悦とは違って、実際に朝鮮に住んでそこで朝鮮の人と同じような暮らしをしながら、まさに朝鮮の土となったわけです。お墓も韓国にあります。そういう方をクローズアップすると、先ほどのお話にもありましたように、「帳消し」にするのかというような話が韓国から出てくるわけです。つまり、日本人はだいたい悪かったにもかかわらず、少数の「いい日本人」がいたということクローズアップすることによって、植民地支配というものを相対化して、しまいには帳消しにすることを目論んでいるのではないかという誤解を持たれてしまうということがあります。

「帳消し」という言葉で、最近まさにクローズアップされているのが北朝鮮との関係でして、これは「相殺論」というふうにするにマスコミでは定着しつつあります。「北朝鮮が5人拉致した」。もちろん、5人ではなくて、

もっとたくさんの人たちを拉致したわけですが、その「拉致をした」ということ、その「悪」に対して日本が過去にしたこと、植民地時代とその前後に朝鮮の人たちに与えた苦痛というものが相殺できるのかどうかという議論が非常に強く打ち出されています。相殺できるという人ももちろんいらっしゃいますし、相殺できないという人もいらっしゃいます。相殺できないという人たちは2つに分かれています。つまり、日本が朝鮮に与えた苦痛というのは、北朝鮮が日本人に拉致ということを通して与えた苦痛よりもずっと大きいんだという意味で相殺できないという考え方の人がいらっしゃいます。

これは代表的な例で言いますと、『世界』という雑誌の最新号に載っているキム・ソッポン（金石範）さんという作家の方の持論が、それを鮮明にそれを打ち出しています。つまり「在日」というものはこれまで被害者であった。被害者であることによって、日本人に対して道義的な優越性を持っていた。ところが、この拉致という問題を通して、われわれは被害者だけではなくて加害者にもなってしまった。そういう苦痛を非常に感じているということです。ですけれども、この拉致という問題が生じたことによって、あるいはクローズアップされたことによって、日本が過去に行なったこと、それは植民地の朝鮮においてだけでなく、関東大震災のときに朝鮮の人たちを殺してしまったということも含めて、そういうことは相殺できることでは絶対ないんだという立場です。

それからもう一つの相殺論批判は逆なんです。つまり、拉致というものは戦争の、あるいは植民地時代の、そういう不正常な時代に行われた「悪」とは、それを「悪」と規定するかどうかはいろいろな立場があると思いますが、そういう行為とは明らかに違ふと。つまり植民地時代に、例えば強制連行、「強制連行」という言葉自体が間違いだという議論が強く出されていますが、その人たちが日本の臣民として半ば従属的に、あるいは半ば自発的に日本のために働いたということと、まったくそういうものとは関係なく、まったく外国の状況も知らない女の子をさらっていくというものとは、同一レベルで語り得ることでは到底ないんだという議論です。つまり、相殺はできないと。北朝鮮の「悪」のほうが大きいんだということです。そういうような、いかに歴史を帳消しできるか、あるいはできないかと、

そういう議論がいまわれわれに突きつけられている問題で、これはわれわれ非常に注意深く考えなくてはならない問題ではないかと思います。

それからもう一つは、「違い」と「同じ」ということですが、歴史はそれぞれの「国、民族」のものだから結局は共有できないものなんではないかという見解がある。けれども、歴史観を共有できないなかで、おたがいの立場を認めあいながら隣国関係をつくっていくべきではないかという見方もある。同じであるべきか、違ってよいのか、そういう議論です。つまり、どこまで同じでなくてはいけないのか、どこから違っていいのかということのをわれわれは広範に議論をしなくてはいけないということだと思います。

### 「歴史観」の違い——文化論の視点も重要

それからもう一つは、歴史感覚というのがやはり違うんだということがかなりのパネリストの方から出てきたと思います。つまり、歴史感覚が違うというのは、個々人の歴史感覚はもちろん違うんですが、やはり制度、政策や法律とか、そういうものによって日本と韓国が違うという部分も、かなりあると思います。やはり韓国の場合は、先ほど道上さんがおっしゃいましたけれども、基本的には国定教科書で教えられて、それによって大学入試といった試験を受けるわけですから、日本のような多様な歴史観が保障されているとは言いがたいわけです。ですけれども、じゃあ日本がそちらの方向に合わせるべきなのか、つまり歴史観というものをある程度統一すべきなのかという議論に関しては、これはわれわれの憲法というものがありますから、到底そういうことはできないという議論のほうが強いと思います。つまり、われわれが歴史というものを、どこまで他者と同じにすることができるのか、あるいはそれが望ましいのかということを経済論で問うと同時に、それはひとつの文化論として問うことも重要ではないかと思います。

というのは、歴史というものの言葉の中身が違うということ、先ほど私が少し申し上げましたけれども、つまり、先ほど饗庭さんがおっしゃったように、連綿と続くその「氏」というものを守る中国、朝鮮の、あるいは韓国の人たちの歴史観と、われわれはやはりそういうものではないわけ

ですから、おたがいに違う点があるということです。歴史というものが、個々人の頭の中で、どういうふうイメージされるのかというものが違うという段階で、それを共有することが果たしてできるのかという問題です。これは非常に重要な問題で、もう一つポイントをあげますと、西洋と東アジアの違いというところにも行き着くと思いますが、どうもわれわれの議論は西洋スタンダードというものをやはり最も望ましいものとして考えているフシがあるんです。それはやはり、国連とか、そういう国際舞台で議論される場合には当然そういうふうになってくるでしょうし、それは理解はできるんですが、西洋における歴史観とか、それから「罪」の問題とか、「責任」の問題というものと、われわれ東アジアにおけるそういうものは、だいぶ違うんじゃないかということが、確固とした認識のレベルでなくても、だいぶ感情のレベルでわれわれはそういうふうにいるのではないかと思います。

先ほど日独の戦後補償の比較をされている方のお話をちょっとご紹介しましたが、その方が言うには、ドイツの人たちは、小学校か中学校くらいのギムナジウムの人たち、子どもたちも学生たちも一緒にこういうふう言うんだそうです。「私たちには罪はない。けれども責任はある」。ドイツの場合はナチスという問題がありましたから、こういうことが言えるということもあると思いますが、知らないことを放置しておくのはいけないということを知って、明らかに認識して、過去のことについて知っていったうえで、誤りだと思ったことに対しては責任を持つということを一様に言うそうです。

これは一種の洗脳ではないかと考える学者もいますが、その人はそれは洗脳ではないと言います。確固たる、自分の自発的な意思のもとに出てきた認識だと言うわけですが、私はそのことを聞いたときに、そういう話は以前から聞いていますが、確かにそれは立派な認識だと思います。「私たちには罪はない」——つまり、私自身が犯したことではないわけです。私の祖先が犯したことについてその子孫が罪をかぶるとするのは、それは誠実なことではないと考えるそうです。ドイツは個人というものが確立されている文化圏です。祖先といえども他者ですから、他者が行なったことについて、その罪を子孫だからといってその人が受け継ぐということは、それ



は不誠実なことで罪を償うことにはならないというわけです。そういう認識のもとに「私には罪はない。けれども責任はあるんだ」ということですね。ドイツの国民として責任があるということです。

## 東アジアなりの歴史の解決の仕方があるのでは

それは確かに非常に立派な認識ですし、私もそういう認識を持ちたいと思う部分もあるんですが、やはりそれはちょっとこの東アジアに住んでいる私の認識とは、あるいは感覚とは違うのではないかなと思ってしまうわけです。つまりどこが違うかと言いますと、私には「責任」というものがよくわからない。ドイツ人の「責任」という言葉によって喚起されるイメージと私の喚起するイメージというにはおそらく違うことでしょうし、「罪」という言葉についても違うことだと思います。それは日本と韓国と中国のあいだでも違うでしょうし、それからもっと大きなことは、日本と東アジアと西洋のあいだで違うんだと思うんですね。つまり、どういうことかと申しますと、われわれ、「われわれ」という言い方はあまりよくないですね、少なくとも私にとって祖先と私というのは、そんなに画然と区切られたものではないです。個というものが十分に確立されていないんだと言われてしまえばそれだけですが、やはりひとつは東アジアの文明的、あるいは文化的な土壌というものがあるのだと思います。

韓国、中国の方も、いまの若い日本人が罪を犯したことではないと知っ  
ていながら、いまの日本人にそれを問いただしてくるんだと思うんですね。  
つまり、その連続性というものです。われわれのなかには連続性という  
ものがあって、「われわれ」というのは東アジアの儒教的な土壌のなかには  
あって、親のしたこと、祖父のしたこと、そういうことを子孫が受け継い  
でいくというようなことがあります。ですから、私は責任というよりもむ  
しろお詫びというような、「お詫び」というのも何か形式的なことではな  
くて、「本当にすまなかった」と。「私の祖父がしたわけではないですけど  
も、私の祖先の日本というもの、日本人がしたことに対してすまなかった」  
という気持ちはあるからだと思います。

ですから、私はこの女性のためのアジア平和国民基金というもののあり  
方というのは、ひとつの私の政治的な、あるいは思想的な立場というより

も、私の感覚的な立場として比較的びったりくるんです。なぜかと言いますと、責任というものより、まず「申しわけなかった」という気持ちのほうが強く先に出てくると。それはおそらくドイツの人たちとは違うのではないかと私は思います。そのときにどうすればよいか。多くの日本人がもし私と同じであれば、実際に多くの日本人が、女性のためのアジア平和国民基金が日本の政府自体がやっているものではないということで、韓国の方から非常に批判を受けていると知りながら、だけれども「すまなかった」という気持ちがあるということで、たくさんのお金を出していただいたと思います。

もしそういう方が東アジアに多いとすれば、つまり日本だけではなくて、韓国や中国のほうも連綿と続く「血」という何か曖昧な、実は実体のないものですけれども、その「血」というものを抛り所にして生きている人たちが、そこに十何億の単位で生きているとすれば、それは西洋とは異なる歴史の解決の仕方というものをわれわれが見出していく必要があると思います。

つまり、西洋のスタンダードというものは国際舞台では非常に強いものですし、なぜ日本は謝罪を先にしてしまっ、それから調査をするのかという話もありました。宮沢首相もそう言ったようです。「まずお詫びをします。けれども、実際に事実だったかどうかは、これから調査をします」。それから、いま野党三党で出している法案もまさに同じなんです、まず謝罪をして、それから調査を並行してするんだということうたっています。こうしたことは、ドイツ人にしてみれば到底受け入れがたいことだそうです。つまり、事実かそうでないかがまだわかってないのになぜお詫びをするのか、謝罪をしてしまうのかというわけです。ドイツは謝罪はしていないそうです。つまり責任は取っているけれども、謝罪は回避しているということだと思えます。

ですから、東アジアにおいては「ドイツ式」がいいというわけではないと思います。東アジアの方は、まず何よりも謝罪を求めていくということがあります。それはなぜかと言いますと、やはりこの東アジアの儒教的な、あるいはシャーマニズム的なと言ってもいい精神的な土壌があって、そういう行為に出ていると思います。ですから、私の結論はこうです。「東アジ

アには東アジアなりの歴史の解決の仕方があるのではないか、それをわれわれが見出していかなければならない」ということです。それを国際舞台の場でも、われわれの精神的土壌がこうですから、こういう解決の仕方もあるんですよと、西洋の方にも訴えていくことが重要であると思っています。

ちょっと長くなりました。私が話して、私がどうですかというのも変ですが、何かほかのご意見ですとか、この歴史認識問題について何かございますでしょうか。

**道上** 今のご指摘の関連でお話しします。最初は歴史観を統一すべきかどうかと、それは国益とどうからむのかという問題です。私の言いたいことは極めてシンプルです。

まず、歴史が政治まみれになってはいけない、これが一つ目です。ある大新聞社のコラムニストの方と議論したことがあります。その人は、「教科書など歴史の問題は、日本の国益をすごく損ねています。だから教科書問題は、国益の観点からきちんと対処すべきです」と言うわけです。その主張は、半分以上は正しいのです。実際、日本は大いに損をしている。「でも、ちょっと待ってくださいよ。では、歴史教科書を政治的な文脈で書くということですか」という問いかけをしました。それは危険なことじゃないか。そのときどきの政治的な声の大きい小さいで、歴史観が変わってしまっているのかということ。例えば日本で、「韓国、中国は、古いことをうるさく言うな」という人の声が政治的に強いと、そういう歴史になる。片や韓国、中国の極端な、隣国への敵意をあおる民族主義者が、「日本はいまもほぼ全員が軍国主義者で、すぎがあればいまでも侵略しようとしている。そもそも日本の国民性は残虐だと昔から決まっている」という人たちの声が強くなると、歴史はそっちの方向にまた行ってしまうのか。これは極めてよくない、最悪だと思います。そういう意味では、歴史が政治に歪められてはいけないというのが、私の第一点です。

ただ二点目があまして、先ほどの伊勢さんの問題提起でもありますが、日本の今のこういう、ふわーっとしていて、歴史といっても他人事で、ちゃんと対処できない。これが日本のイメージを、国益を損ねているのは事実だと思います。これは重要なことで、ありていに言えば、日本国は、皆さ

んを含めた日本人は損をしていると思います。国や社会の品格を損ねている。そこは何とか立て直したい。ですからそこは歴史観のあり方が国益ともうダイレクトにつながっているという認識できちんと考えなければいけないという、その2つの点です。

さっき小倉さんの話にドイツとの比較があって、確かに文明の差、精神史の差というのもあるし、ドイツと日本の差というものもあります。東アジアには東アジアなりの解決法、やり方があるのでしょうか。

2つほどコメントがあって、一つは宗教も含めた文明論ももちろん大きいと思うのですが、もっと単純明快な話があって、戦後の経済や外交の構図がヨーロッパと東アジアでは違った。端的に言うと、ヨーロッパは各国ほぼ横並びの先進国であった。ドイツもフランスもイギリスも、つまり同盟国側も連合国側も、もちろん経済水準の若干の差はあるけれども、みな先進国でした。

東アジアは全然違ったわけです。最近でこそ日本は調子が悪い、韓国に部分的に追いつかれたりしていますが、ずっと長い間、日本は「アジアの富士山」であった。つまり、経済発展では日本という高い山だけがそびえていた。韓国や中国、フィリピンやカンボジアは貧困と戦乱の中にあった。つい20年ぐらい前は「貧困のアジア」という現実があったのです。ヨーロッパは逆に「八ヶ岳型」でした。この関係、経済や外交という要因が大きいと思います。

## つながっている歴史と政治・国益

さて、先に出た「罪はないが責任はあるのか、責任もないのか」ということですが、ここは「責任」という言葉ではちょっとしんどいと思う人は、別にその言葉に思い悩まなくていいと思うのです。ただ少なくとも私は、「関係はある」という認識は日本人みんなに必要ではないかと思います。さっき申し上げたように、私はたまたま政府の人間で、裁判の被告席に立ったわけです。皆さんは別に被告になる必要は全然ないのですけれども、最近の若い人たちにも「関係ね一よ」という言葉がありますけど、そうではなかろうと思います。「関係ない」ということではすまないだろうと思います。

要するに、日本人に生まれたくて生まれたわけじゃないという人も、現に日本人だから、ある意味で日本を背負っているのです。市民も学生も、国家から、社会から逃げることのできないものがあるのです。日本は、アフリカや中南米の一部のような貧困はないのです。エチオピアに生まれていたら、モザンビークに生まれていたら、人生だいぶ違ったわけです。その点ではすでにもうみんな、日本という国を背負っているわけです。都合のいいところだけを享受して、しんどいところ、言われて居心地の悪いところだけ、俺は関係ないよと目をそむけるのはたぶんフェアじゃない。許されない、世界に通じないだろうと思います。日本国を代表して発言、行動する必要はないのですが、60年前、100年前のことも自分につながっている、関係あると、自分は知らなくても隣の国の人たちにとっては、いままも大きな問題であるということを知っておいたほうがいい。そういう意味で、それを「責任」と言いたい人は言ってもいいし、責任というのは重すぎていやで「関係」程度にしたいという人は「関係」と言えばいい。ただそういう荷物は、私も皆さんも、さらに若い人も、それぞれ背負っているのだと思っています。

**李敬宰** 質問です。要は歴史観の統一は、結局は必要なんですか、あんまり必要ないんですか？ 国益の問題もからんで出てきましたけれども、政府として、政府の役人さんが、なかには「ええことしたんや」言う人もいらっしゃいますよね。（責任をとって）すぐやめる方もいらっしゃいます。そんなバラバラなことで外交ができる、まあ国益の問題から言ってもですね、あるいは日本社会にとっても、歴史観の統一というのは、ある程度必要じゃないかなと思うんですけども。

**道上** よく知られた「村山総理談話」があります。これが政府の見解で、今もそうです。あの戦争は、侵略は、他人事ではなかった。それで苦痛を受けた方、亡くなった方はおられるし、「従軍慰安婦」のような人道に反することもあった、お詫びをしなきゃいかんという意味です。そういう大筋を歴史認識とおっしゃるのであれば、それが政府の見解です。98年の日韓共同宣言も、歴史認識の重要さを書いています。私どもの先輩は、色々な立場のいろんな反発を受けながら、あそこまでいったのです。ただ、個々の歴史事象をどうみるかは、これが正解という一つの答えは必要ないし、

政府が介入していくのも望ましくない、学問研究にゆだねるべきだと思います。

**李敬宰** 「村山談話」も村山さんのあとの総理の方も言われているんですけども、口で言うだけで中身がないんです。地方の行政へ行ったら、大阪府だとか、何々県でも、その行政の人たちが一応行政機構できちんと国のシステムを背負っているわけですが、彼らがそういう認識を持っているかということ、まったく持っていないんですね。だから、われわれ外の間ではないんですけども、「在日」からみると、「口では一人前のことを言うけれども、中身はないやないか」と、こう思ってしまうわけですよ。少なくとも行政システムのなかには、「村山談話」が統一してきちんと支柱のようになるということが望ましいのではないかなと思うんですけども。

**道上** そう思います。

**李敬宰** なぜ、ならないんでしょうと問いたくなってくるんですけどね。

**道上** 中身がないというのは、例えば大阪府ですとか、高槻市ですとか、そういう現場で…。

**李敬宰** そうなんです。1995年「村山談話」で「侵略」「植民地支配」というのが出ていますんですけども、銘板にしようとしたら、もう寄ってたかってダメだと、こうなるわけですね。それで銘板がつかれない。それで「侵略」という言葉を別の文言に変えて銘板をつくってしまうという、これが多くの現場の歴史認識、日本社会の現実的な歴史認識だと思うんです。「村山談話」は外に向かって言うときはああいうかたちですけどね、外国に向かってとか公的には、でも、中身はちょっと実際違うんじゃないかなと思うんですけども。

**小倉** いかがですか？ これに関してでも、ほかの話題でもいいですが。はい、どうぞ。

## 歴史と自分を結びつける文化が大事

**伊勢** 「統一」とおっしゃるのですが、私はこの基本線で合意があるという、合意がやっぱり日本の姿勢として必要なのではないか。けども、歴史の全体の理解での統一ということと、基本的な合意、例えばアジアではこういうことをやったんだという合意は、私はやはり必要だと思います。

それから「村山談話」というのは、これを明らかにしたただ一つの声明であって、非常に日本にとっては大事なんですけれども、アジア女性基金は、これを基にして発展してきた事業なのです。しかしながら、ではこれを本当に日本国民全体が認識として確立したのか、自分たちがそう思っているかということ、いま非常に問われているんじゃないかなという思いがいたします。

それから、歴史の認識で先ほど饗庭さんがおっしゃった「歴史感覚」ですね、歴史の事実が証明された場合に、その事実を事実として受け取る、そういう姿勢がありますかということ、やはり問いたいんです。というのは、いろんな方とお話しして、こういう証拠、ああいう証拠があると言っても、まだアジアをそんなに不幸にしたわけではないというような議論がある。認識以前に、歴史というものと自分の考えを結びつける態度、その文化が大事なんじゃないかなと思います。

**小倉** わかりました。やはりこれも何と言うんでしょうか、自由という問題と関わってくるのかなというふうに、まさに「自由」というキーワードで非常に右翼的な歴史観を打ち出している人たちが1990年代に非常に力を得ているわけです。その背後にやはり中国、韓国という問題があると思いますね。つまり、中国、韓国は歴史観を統一して一枚岩のようにやってくる。対してわれわれはバラバラだということで、バラバラであればやはり力が弱い。国家全体の国益という意味で力が弱くなるわけですから、そういうものに対抗するためにわれわれもある程度歴史観を統一しなければならないという右側の動きもあります。もう一つ、また左側は左側でやはりそういう歴史観を統一したいという姿勢がある。そういう統一と言いますか、合意ですね、そういう動きもはっきり出てきた1990年代の後半からは、やはりバラバラなものをどうやってまとめあげていくかという方向性が非常に強くなっていると思います。

**高崎** 歴史の教師として思うことは、一枚岩というのはむしろ怖いなという感じがするんですね。つまり結論だけを押しつけることにならないか。それがたまたま、いわゆる右であったり、左であったりする違いだけになる。

李さんに対して少し疑問を提起したいわけですけど、仮に、では、侵略

と書けばそれでいいのかと言うと、僕はやっぱりそうじゃないだろうと思うのですね。むしろ僕は結論よりも過程、そういう認識に至る過程が非常に重要だと思っています。

だから僕は学校で自分もそういうふうに教えるように努力しているつもりです。いくつかある見解を紹介して、なぜそういう見解の違いが出てくるのか。その過程について学生に考えてもらいたいと思っている。そういう言い方をよくするのですけれども、とにかくそういう過程を省いたり、非常に簡単にして結論だけを教えて、それで統一した場合には、その結論がいかなるものであれ、僕はそれは非常にもろいものだと思うし、本当の歴史認識ということにはならないのではないかと思うのです。

小倉 いかがでしょうか。

## 自由に議論する、教える環境ではない

李敬宰 要は文字にすればいいとかという話じゃなくて、そういうことが本当に自由に語られているのか。例えば、いま、中学校の学校の先生方が日韓の歴史を教えるときに、「侵略」という言葉をつかって教えると偏向教育だとして非常な圧力がかかってくる。教えにくい雰囲気ができあがる。それを教えてしまうと、不適格教員とは言わないですが、現場から外されてしまうと人事異動で圧力が加えられてくるという心配を、去年以降、教科書が変わってからずいぶん心配する先生方がいらっしやる。

そういう議論を現場のほうでやっているんですけど、「考え過ぎや」と言われたらそうかもしれない。私は、そういうことを自由に議論できるような環境が、あんまり保証されていないのではないかなと思っています。

そんなに韓国の教育事情は知らないですけど、一つのことを結論だけ押しつけるような教育も決していいとは思わない。けれども、日本のように本音と建前をうまく使い分けて、実際あまり自由に教える環境がないのに、自由に教えなさいとか言っているというのも、同じようなもんかなと思ってしまうのですけれども。

小倉 実際上は、自由がそれほど保証されているわけではなくて、現場ではそうだというお話ですね。いかがですか。

饗庭 私は現場にいるわけじゃないんで、ちょっと距離をおかざるを得



ないのですが、いま指摘されたような状況というのは、私らの年代の者からみると、終戦直後から少なくとも20年、ないし30年近くにわたって、むしろ逆の方向からの圧力があって教育が歪められたという思いを抱いていた人たちの反動として出てきているのだらうということが一つ。

それから、歴史というものはとかくナショナルヒストリーですよ、出発が。そうすると、どうしても、いまここでつかわれた言葉で言うと、「国益」というものに縛られる傾向があるということ、それが影響しているのだらうと思うんです。

日本の歴史がいろいろなタブーをつくってきた。そのなかには、李さんがおっしゃったものも入るかもしれませんが、そのタブーというものがあるんですね。先ほど一つ具体的な例をあげましたけれども、それは戦前・戦中の歴史、その現実を知っているものからすると、どうしても頭から拭い去ることはできないのです。国が一方的に歴史を、一つのものをつくって、それしか教科書に載らないということになると、これはえらいことになるなという思いが私などには残ります。そういう意味で、完全なものというのはないんでしょから、試行錯誤しながら、いまみんなが苦しんでこれからつくろうとしているもの、いいものができればいいなと私は期待しているのです。

それを踏まえて4つほど指摘したいのです。

小倉さんがおっしゃった「罪」と「責任」ということ。これは本当に私ども自分たちの問題として考えなくてはいけないのですが、私はこんな連想をしたんです。私どものポキャブラリーのなかには「罪九族に及ぶ」という言葉があります。それは自分を中心にして、子、孫、曾孫、玄孫そこまでは自分の責任が及ぶ。例えばしつけだとか何とかという意味を含めて、そこまで。家族の歴史をどうみるかということにも関係するんですが、責任を持つぞという。それから、もしも私が悪いことをしたらば、その父、祖父、曾祖父、高祖父まで墓を暴かれる。私がやった罪がそこまで及ぶのだという、これも一つの歴史認識なんですが、そういう意識が私どものモラルのなかにあるような気がする、言葉としてもあるわけですから。そういう、ことのほんわかとした範囲のなかに入る問題なのかなあという気がしながら、聞いておりました。

次は、先ほど歴史というのは、そもそもナショナルヒストリーから発するんだろうと話しました。そして、近代的に言えば、国境を越えた国や民族との関係史というものが、私ども自身の歴史として認識されなければいけない。つまり、独りよがりの歴史はいけないのだ、それは成り立たない、自分たちの利益にもならないんだ。これはパネリストから何回も出た議論で、そういうものだろうと思います。

例えば今年に入って開かれた日韓歴史共同研究会議、先ほど（伊勢）事務局長も触れましたけど、そこに出た方から私聞いたんですが、長いテーブルがあって真ん中に両国の国旗が並んでいて、日本人はこちら側、韓国学者は向こう側というかたちで議論をしたのだそうです。そうするとこれはどんなに意識が進んでいる人でも、やっぱり真ん中に両国の国旗が並んで、向こうに韓国の学者、こっちが日本の学者となったら本当の国境という境を除いた歴史的な、学問的な共同研究というのは雰囲気としては、極めてまずいではなかろうかと思いますね。やはり、そういうあたりから歴史というものへの取り組みが、考え直す必要があるのかなあという気がいたします。

私どもジャーナリズムをずっとやってきたのですが、ジャーナリストというのはいい加減なところがあるのですね。そこで、大体その時々知識人というのがいまして、森羅万象に通じて深い学識を有し、同時代の時代精神を体現し、時によっては同時代人に警鐘を発する。そういう役割を負った人がいたのですが、これだけ社会が複雑多岐になりますと、一人の人間がそんな資格を持つという人はちょっと考えられないわけです。それで中間的な知識人と言いましょか、学識経験者、新聞の論説委員だとか、国土的な官僚だとか、道上さんはその一人になるのではないかと思うんですが、エリートの企業人、世界をよく知っている企業人という人たちが同時代に先が見える、警鐘を発するというかたちで仕事をしてくれる。

ジャーナリストというのは、私の理解では——ワシントンポストの前の持ち主のフィリップ・グレアムという人が言った言葉で、私はジャーナリストになったときから、なるほどと思ってそれが頭の片隅にあるんですけども、ジャーナリズムというものは英語で first, rough draft of history という言葉があるんです。ジャーナリズムというのは歴史の粗稿の第一稿

である。つまりジャーナリストも歴史を書いているのだということを言われているんだろうと思う。歴史を歪めるなどということは許されない、だから一生懸命取材しろということなんだろうと思ってやってきたわけです。

そういう意味で歴史がどうつくられるかということについて、私は一生悩んできましたので、いまの歴史認識と言って片付ける、片付けると言うとそれ自体も悪いですが、なにか単語になってしまうと、何か悲しいような気がしておるということが第2点です。

## 歴史研究にウソは役に立たない

歴史というものに、先ほどから言っているのですが、嘘というものが歴史研究には役に立たないということなのです。私の友人が、日本には帝国史、日本帝国史がまったくないという。帝国主義史というはあるけれども日本帝国史というのはないねと。

例えば満州国、この人は満州国を専門にやっている人ですが、中国では「偽満州国」といって、それ自体が悪い存在という認識から発しているわけです。しかし現実として満州国というものはあったし、台湾、朝鮮が日本の領土になる。そこでどういうことが行われたかという、本当に史的な、知的な、感情的ではなくそういうものを構築しようという努力が、これまでどうもなされない。しようとした人はいる。私の友人の人もそれなんです、しかし学会において力を持ち得ていない。ということで、それをしようじゃないかといま、若い人たちに呼びかけていますが、そういう意味で、いま過渡的なところなのではないか。そういうふうに李さんにも理解していただけるとありがたいなという気がいたします。

最後ですが、歴史認識という場合に、私は2つあるような気がするんです。例えば過去の歴史的事実をどう認識するか。これはあります、歴史的事実そのもの。歴史家の高崎先生に詳しくご説明いただければありがたいのですが。歴史資料をとにかく掘り出して、みんなが学問的な研究の対象にする。これはできる。しかしその歴史的事実をどう評価するかというのは、これは一人ひとり、先ほどの議論で言えば1億2000万あっても少しもおかしくないわけです、理屈で言えば。

そういう意味での歴史認識と、もう一つはわれわれが歴史としてとらえ

てるもの、これは常に現在からみてのものです。歴史というのは常に現在が起点になるわけです。その現在というものが歴史の大きな流れのなかで、どこにあるのか。

## 「いま」に対する時代認識を必要としている

例えば、いまここにお座りの多くの方が関与している「従軍慰安婦」の問題がどうして取り上げられるのか。私は20年ほど前に福田赳夫さんとお話しをしたときに、ある韓国の方が日韓関係史を書かれた、その序文を書いてくれと言ってその方が福田さんに頼んだらしいんですね。それに関してちょっと話をしたら、「慰安婦問題」の話になった。そのとき福田さんから出てきた言葉は「君、50年前の話だよ」とこういうわけです。それは政治的な処理です。処理としての50年前なのです。彼の頭のなかには整理されてるわけですよ。

しかし問題は、私がいま言いたいのは、いま「従軍慰安婦」が問題になる、またはアメリカで第二次世界大戦のことが問題になる。さらには黒人に対して賠償しろと、奴隷労働させられたことについて歴史的な損害賠償をせよという訴訟が起こるといふ、その歴史。言葉を変えて言えば時代認識、それをわれわれは必要とするんじゃないかなあということを考えます。

**小倉** どうもありがとうございます。どうぞ。

**金恵京** 意見があるんですけども、韓国の場合は歴史を教えすぎだと思うんです。でも日本の場合は歴史を教えなさすぎ、そういう差があって、韓国人に聞くと、歴史とか精神文化のことを語り合おうとしたら、とっても日本というのは隣にあるんですけど、近くても遠い国になるしかない。

この場でも韓国人の方もいらっしゃると思うんですけども、いくら歴史のことを話したとしても、日本が歴史のことで謝罪して反省する。反省したとしても、韓国人の場合は、日本自体を許せる気持ちがないと思うんです。いろんな、自分から考えると、遠くから見直してみるとかということがない。

ただ私が言いたいことは、感覚、感情だけではなく、一方、歴史だけ知っていることでも駄目だと思うんです。いまの新世代に関しては、過去の歴史を完全に知ったうえで、ノーマルに日本人とつきあっていく感覚を持つ

べきであると思うのです。

いまの日本の若い世代の場合には、歴史もよく知るようにして、そして自然な感覚で韓国人とか外国人とのつきあいをしてほしい。また、韓国の若い世代の場合には、いまの若い世代は歴史もきちんと知っていて、感覚的にも日本人と自然につきあえるという理想的なかたちに近いんじゃないかなと思います。だから、おたがいに歴史認識の違いで終わるのではなく、歴史認識の違いはあっても、それはこれからのことです。若い世代がどういうふうに認識していくのかという差で、それがこれからの課題じゃないかなと思っております。

**饗庭** 私は韓国へ赴任したときに、若かったのですが、現地の新聞記者と議論になったことがあります。それは、彼が言うには日本人は歴史を知らない、歪めているという話だったのです。私はあなたの言葉のうち「知らない」というのは認めよう、しかし「歪めている」というのはちょっと当たらないんじゃないかと返しました。単純に知らない、教えられていないんだと言ったらば、彼は烈火のごとく怒って、あれだけのことをして知らないとは何事だ、それこそこれ以上の偏見はあるかと言って、しばらく口をきかない関係になってしまったのです。さらにしばらくすると、その人が、チョン・ドゥファン(全斗煥)政権の偉い人になって青瓦台(大統領府)に入ったのでびっくりしたのです。そうしているうちに、60億ドルを無償で貸せという要求になって出てきたので、ああ、そういう話の筋だったのかと思って了解したのです。

確かに知らないということは、ただの知らないじゃ済まないのが日韓の関係だということは痛いほど経験いたしました。

**小倉** そうですね。知らないというのは、先ほどドイツの話も出てきましたけど、責任の問題、それから道義的によくないということと同時に、不利だという話も出てきましたね。特に国際的な関係を結ぶうえで、非常に不利だということ。あまり利益の問題に還元したくはありませんけれども、そういうことが現実にあることは確かだと思います。

それから、さきほど道上さんがおっしゃったことで重要なことは、やはりヨーロッパと東アジアの違いは、どれだけ対話ができる土壌が、つまり法的な土壌、あるいは人権、あるいはすべて人間というものに付与されて

いるものの違いがあるということです。ヨーロッパは比較的それが均一ですけれども、東アジアの場合は、果たして民主化されていない国の統一された歴史観と、われわれのように先ほど自由がないとおっしゃいましたが、少なくとも憲法上は保障されている。どんな意見も言うことができる、そういう人たちの歴史観が同じ土壌で語り合うことができるのかという問題は、私たちが非常に深く考えなくてはならない問題であります。

韓国は民主化されました、民主化されて非常に活発に自由な意見が交わされているような感じもしますけれども、やはり先ほど饗庭さんがおっしゃったように、日本にかつていらっしゃったような啓蒙的な、全体的な知識人というものが日本ではほとんど力をなくしていますけれども、そういう人たちが韓国ではまだ活躍していて、そういう人たちが世論をリードしている。日本との交流をしようとその人たちが言えばするんだし、するのをよそうと言えなくなってしまう。そういうような、要するに制度的には民主化が保障されているけれども、人間の意識のうえで、そういう文化的な巨人と言いますか、偉い人が言ったことは正しいんだというような考えを持っている人たちと対等にしゃべることができるのかという問題があります。

それから私は、個人的に高崎さんにお話をおうかがいしたいのは、——先ほど歴史観というものは多様なんであると、それをいろいろ教えるとおっしゃった。私もそういうやり方をしています。私は歴史家ではありませんけれども、日本と韓国のことについては学生に話すときには、多様な意見を羅列します。そのなかでこういう考えはこういう考えのもとに出来上がっているということを、一応全部学生に話して、そのなかで学生に考えさせるという方式を取っています。高崎さん、いろいろな教科書の現場で豊富にお持ちですので、ちょっとお聞きしたいんですけども、例えば日本と韓国のあいだで新しい歴史教科書、共同教科書、あるいは副読本をつくる場合に、たくさんの意見を羅列したかたちのテキストというものづくり得るのでしょうか。

**高崎** それはいま、東京学芸大の君島さんたちとソウルの私立大学のチョン・ジェジョン（鄭在貞）さんたちが一緒にやっているものでは、いくつかの部分については両論併記をするというふうなことを言われていま

す。とてもいいことだと思いますけど。

**小倉** 例えば韓国では共産主義系の独立運動を称揚するということではできないことですし、日本との関係で言えばそういうこともあったことは事実です。——ということを考えて、どうなんでしょうか。日本と韓国だけやるということと、日本、中国、北朝鮮それを全部視野に入れてやるというのとまた違ってくると思いますし、両論併記というの、ちょっと難しくなってきましたよね。

**高崎** だけど、その自由な範囲というのは、相当拡大してるのではないかというふうに思います。1990年代のはじめに韓国民衆史事件というのがありました。それは若い大学院生クラスが「韓国民衆史」というのをまとめたのですが、いわゆる左翼運動まで含めて事実は事実として相当取り入れたために逮捕された事件で、それはもちろん発売禁止になったわけです。しかし、まもなく自由になって、その本もいまでは読めるようになりましたし、相当そういう意味では韓国はいま自由になっていると言えると思います。

**小倉** 共産主義の運動をそのまま直接描くということは、ちょっとまだ難しいと思いますけれども、比較的自由になりつつあると、そういうことですね。

## 基本的歴史事実も知らないことの問題

**道上** いまのお話で気づいたことを簡単に申し上げます。歴史「認識」というと、何か厄介で難しいという印象を持つ人が多いのです。研究者でも、認識を果たして統一すべきかどうか、いろんな議論が当然あるわけです。でも、認識以前にもっと切実なことがあります。「歴史についてごく基本的なこと、当然知っているべきことも知らない」ことが一番大きいと思います。理論的、学問的なこと以前の問題です。そもそも、日清・日露戦争も、単に中国と、ロシアと戦争したというのでなく、朝鮮をめぐる、朝鮮における争いであった。そういう基本的事実を、多くの日本人が知らないのです。1919年の三一事件の後に、堤岩里（チェアムリ）事件\*がありました。三一事件のあとで社会が騒乱状況にあり、日本のお巡りさんが現地で殺されたことに日本の官憲が過剰反応し、地元の人二十数名を押し

\*堤岩里事件 「歩兵中尉以下12名は、堤岩里キリスト教会堂にキリスト・天道両教徒約25名を集め訊問・訓戒を加えんとした際、教徒ら反抗せしため、ほとんど全部を射殺し火を放ちたる…明らかに刑事上の犯罪を構成するも…これらの行為を公認するは、軍隊ならびに警察の威信に関し鎮圧上不利なるのみならず外国人に対する思惑もあれば、放火はすべて検挙の混雑の際に生じたる失火と認定し…」(出典「長谷川朝鮮総督 原首相宛電報」1919年4月22日)

込め、火をつけて殺害してしまった。その前の閔妃暗殺事件は、韓国では知らない人がいないと言えるほどです。王妃が、王宮に押し入った外国人の暴徒に殺害されたとしたら、それはどの国でも長く記憶されるはずですが。

基礎的な歴史を、事実を知らないということが一番大きいし、これが「歴史問題」で日本が損をしている、その根本にあると思います。

日本の中学、高校の社会科の先生方と話をしました。現場の先生に「日清・日露戦争をどう教えるか。よいことと教えるのか、悪いことと教えるのか」とたずねたのです。「あの頃、富国強兵、殖産興業で、厳しい国際的角逐のなかで日本が国益確保のため、アジア近隣国に影響力を確保しようとしたのは自然な流れだった。ただ、そのなかで日本人が知らないような、非人道的行為があった、民族の強い抵抗があった。そういう負の、影の要素をも併せ見るべきだ」との主張がありますね。「アジアを欧米先進国の侵略から守り、解放する意図」が一部にあったとすれば、それも紹介した方がいい。でも、アジアでの日本の行動の実態はどうだったか、美しい意図に反する行動がなかったも、総合的に問うべきだということでしょう。

そういう議論を当然中学、高校で教えているのかなと思ったら、先生方の答えは最悪でした。「いや道上さん、そういう歴史教育をできれば一番いいのですが、全然実態は違います」という。「日清、日露戦争から第二次大戦まで、善か悪かのどちらかです。先生によって、よかったと教える人と悪かったと教える人と単純に分かれてしまいます」と言う。世の中の現象は、光と影がつきものです。まして歴史は複雑です。見る人によっても違う。それを、光の部分だけ教わる生徒がいて、一方で影の部分だけを注入される生徒がいる。これでは、何のために歴史を勉強するのか、疑問に思います。

## 「歴史問題」より「拉致」に流れるマスコミ

高崎　いま現在の大事な問題だと思うのでひと言付け加えたいんですが、現在行われている日朝交渉は大きく分けると歴史の問題と現在の問題に分かれると思うんです。現在の問題のなかに核の問題があり、ミサイルの問題があり、拉致の問題があるわけですがけれども、日朝交渉でも両方あるいは包括的にやることになっていたはずですが、歴史問題についてはいま現



在はやられてないみたいです。

テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等を見ればおわかりのように、紙面、画面はもっぱら拉致問題です。次、今後のことが問題なんですが、いままで在日朝鮮人がかなりやってきたと思うんですけど、在日朝鮮人は韓国系の人も含めていま拉致問題でもって、それを言うとも問題を相対化するのかというかたちで言われる。また道義的にやはり韓国、朝鮮人側にも問題があったということで、非常に萎縮している感じです。結果として金石範さんのように、先ほど小倉さんが紹介されたように雑誌「世界」で韓国人、朝鮮人として日本側に歴史認識に問題ありということを書いてますが、あのように年のいった地位の確定した人は何とか頑張っけて書けますけど、とにかく若い人がいまそういうことについて書けない、言えないような雰囲気があります。非常に問題だと思います。

また、日本人の歴史学者も、やはりそういうところにくらか怖れをなしてるのか、あるいは書く場そのものが非常にそういう人にとっては少ない状況ができてきてます。つまり歴史問題があるということについて書かせてくれる場所があまりないというふうな状況があります。本当に言いにくい、言うともまた批判されそうですけれど、あまりにも拉致問題、核問題、もちろん両方ともとても大事な問題ですが、偏重しすぎていて歴史問題について議論がされていないという現状について、皆さんにもちょっと考えていただきたいというふうに思います。

**小倉** 先ほどの道上さんのお話で質問があるんですけども、歴史教育、中学・高校のレベルでの歴史教育において、やはり教師が生徒にこれはいいものなんだよ、悪いものなんだよということを教えたほうがいいわけですか。多様性という意味では、2つに分かれているのがおかしいことであってという意味でしょうか。

**道上** あまり単純に大きな、いろんな複雑な事象をマルバツ、白黒で分けるのはそもそもおかしいと思うし、間違える可能性も大きいと思うんです。

**小倉** 教師が個人的な意見として言うのはおかしいというわけですね。生徒に考えさせるというのはいかがですか。

**道上** 個人的意見、大いに結構です。ただ、一面だけを見させて真っ白

や真っ黒に塗りつぶすのはおかしい。足して2で割れということではないのですが、物事の表と裏、光と影を見つめること、通俗的理解と違う事実も紹介すること。何より生徒に考えさせること。これこそが重要だと思うんです。

**小倉** なるほど。そういうことですね。

やはり知らないということは本当にそうでした、私も大学の1年生に入ってくる学生たちを見ていると、それが実感ですね。ほとんどの学生は日本と韓国が昔戦争したと言うんです。戦争して日本が韓国のことを負かせてしまって、非常にひどいことをしてしまった、そういう認識を持っていますね。どこでそういう認識を持つのか、それも確固たる認識なんです。戦争したんじゃないですかではなくて、戦争したんですという認識なんです。何の戦争なのか、東学のあの甲午農民戦争のことを言ってるのかなどと思うと、そうではなくて、何か昔、日本が大きな戦争をしてアメリカに負けてしまったんだけど、その戦争の過程で朝鮮半島を負かしてしまったというような認識を持っているんです。非常に摩訶不思議ですけども、それが学生の頭のなかにこびりついているということが多いです。

よく聞いてみると、やはり日本史、世界史というものをやらないで大学に入れますね、いまは。特に私立の大学はそれらをまじめに学ばなくても入れるシステムになっていますので、大学の入試のシステムがおかしいのかもしれない。要するに大学に入る段階、18歳の段階で、歴史事実の知識がその程度しかないわけです。ですから、それを中学、高校、あるいは小学校のレベルで近現代史をやるというのは非常に重要なことだと思います。

この第2部のセッションも時間になってしまいました。ここが非常に白熱する部分で、もうちょっとお話ししたいという気もしますが、第3部、日韓これからのコミュニケーションのためにという部分が残っておりますので、そちらにいきたいと思います。日韓「これからの対話・コミュニケーションのために」、韓国理解と日本の課題という部分に関しては饗庭さんに問題提起をしていただきたいというふうに思います。

## セッション3

### 都市化と共通意識、日に1万の往来——日韓はよくなる

**饗庭** いちばん難しいテーマを割り当てられまして、老人がいじめられてる感じになります。(笑)

シナリオはいくつも考えられます。よくなる、悪くなる、変わらない、だろうと思うんですが、私はあえてよくなるはずであるというほうを力説したいと思います。

第1の理由。両国とも急速に都市化していて、生活感覚的に共通化が進んでいると思います。これは先ほど手をあげられ方、韓国へ行かれればもうその場でわかることですが、あそこは人口4600万人でその都市集中度がすごいです。だいたいアジア、私はほとんどアジアしか知らないんですが、各都市をまわって、例えば上海、広東、北京でもそうです、このごろ。シンガポール、バンコク、都会の生活者というのは、自分の国の田舎の人よりは、例えばタイの人と話していて、私と話をするほうが通じると言うんです。うちの田舎の人は、チェンマイから出てきた人、そういう話を数年前に聞きました。つまり都市化というものは、これは都市化の本質としてだろうと私は思いますが、共通のものを生み出します。

第2。先ほど、どなたかが言いましたが、1日1万人の交流があります。これは1965年、日韓基本条約ができたとき、1年間の渡航人数がだいたい1万人だったのですがいま1日。よく韓国のマスコミ報道とサイレントマジョリティのパーセプションにはだいぶ違いがあるということを言われます。マスコミは愛国主義者、ナショナリスティックだと。私は韓国の新聞を読んでいてそう思います、かなり熱が入っているなど。例えば先日の天皇の「ゆかり発言」のときの韓国の新聞の盛り上がりようはすごかったです。これで日本がわれわれの後裔である、孫文化であるということがわかったという指摘から、油断しているとこれは日鮮同祖論としてまた取り込まれるぞという警戒論とか、実ににぎやかでした。それはとかくナショナリスティックというのは、極端に走るという意味は本来はないんでしょうけれども、中庸から外れていくという意味ではその傾向があると思うの

です。

私どもがいた30年前には、それが決め手になったかもしれません。だいたい韓国のジャーナリストというのは、私のようなだらしのないものとは違って本当に知識人として、社会の木鐸、いや「金鐸」として警鐘を鳴らさざんばおかずというような燃えている人が多いですから、とかくそういう傾向ができると思うんです。しかしたとえマスコミ、ジャーナリズムがそうであっても、1日1万人の交流の実態、これは無視できません。このあいだある新聞の編集責任者と言ってもいい方と話しをしていたら、「それは影響を受けます。われわれが書くことと見てくることと違ったらとたんに新聞が売れなくなりますから」という話をされてましたけど、そういう意味で私は急速に変わるだろうと思います。しかもそれが若い人を中心に行われてるということは将来有望であるなと思っております。

ただ年寄りのために一席弁じますけれども、日韓文化交流会議は年寄りの集まりです。平均年齢はそれでも50代です、若い人もいますから。歌人の黛まどかさんとか30代もおりますから平均年齢はそんなに高くないんですが、とかく年寄りが発言する会議です。そこでもこのあいだはじめて知ったのですが、1965年にソウル大学の学生委員長として基本条約反対のデモの先導に立って、おっかなびっくり旗を振っていたとご自分が言う——、旗を振っていた人が日韓文化交流会議に積極的に出てきて、ご存知の方もいるかもしれませんが、日韓の宮廷音楽、合奏会をやりました。あれをまとめてくださいました。それだけ日韓関係を何とかしようという古い世代の人でもそれだけ変わっているのです。

それから「ソウル宣言」を10月7日、出したのですが、あまり日本の新聞では伝わらず、韓国の新聞には割合大きく載りました。そその素案を検討しているときに、「日韓双方が過去の不幸な時代を乗り越えて」という文言があるんです。これはある意味で日韓のそういう文章の定番です。私はどうも前後の関係から言ってそれはおかしいと思った。後ろに「われわれはそれを乗り越えなければいけない」というのがあるわけです。「乗り越えてワールドカップが実現できたと言ったら、ではもう乗り越えられるものはないじゃないか」という議論をしました。そのときに日本側の委員の先生方は、まあそうだけど、少し刺激的過ぎるからやめておいたらどう

だとも言われました。私があえて言ってみたら、わかった、そうだねということ、さっとそれは削除されました。10年前だったらちょっと考えられないです。最初に日韓フォーラムができたときの空気を考えたら、そういう文言を落とすことで1日議論をしたらどうと思いますが、そういう意味ではいま、年寄りも変わっていますから大丈夫だろうというのが一つです。

それから、よく日韓の相互理解をやるには喧嘩のつもりでがんがんやればいいんだという説があります。これも一つの手だろうと思うんです。それができる雰囲気の中であつたらばそれは構いませんが、やはりひとつ日本側での配慮というものが必要になるなあと感じます。

これも具体的な話をいたしますけれども、日韓文化交流会議というのできて、日韓の文化を相互に、例えば韓国が日本の大衆文化を開放する機運のときでしたから、どんどん開いていこうということで話が進んだわけです。そして日本側から、日本がイギリスやフランス、ヨーロッパ諸国と、例えば「イタリア年」を日本でやっているのと同じように、「日本年」を韓国でやってください。日本で「韓国年」をやりましょうという提案を小淵さんがしたわけです。それに対して韓国側はなぜか消極的でした。それからしばらくして、私はここ韓国大使館にいる公使クラスの人に食事に誘われました。そのときに「こういう話をいまやられるのは大変いいことだ。しかし日本年ではたくさんやることでしょう。大相撲持ってきてもいい、歌舞伎を持ってきてもいい、何を持ってきてもいい。しかし韓国から、いまそれと競争するかたちで出せるものを考えてくださいよ」と言う。だから文化交流会議というのは日韓交流のエンジン役である必要もあるけれども、そのエンジンにはブレーキをちゃんと仕組んでくださいよ、と言われました。

### 「理屈3割、情7割」の外交といわれた大使

そのときに私は、道上さんの先輩で一時韓国大使をおやりになって、その後、外務次官になられた須之部量三さんという方の話を思い出しました。彼は着任して早々韓国語で田舎へ行って演説をして、韓国のお年寄りに涙を流させた人なんです。韓国に対してこういう人が出てきたか、ウリマル

(われわれの言葉)で話してくれたと言って感極まって泣いた人が大勢いた。そういう大使です。

その人がなぜ駐韓国大使になったか。次官になるような人ですから、どこでも行けたわけです。韓国大使を取りますか、北京の大使を取りますかとオファーされたときに、須之部さんは、「じゃあ、韓国をやらしていただきますよ」と言った。私は後で聞いたことがあるんです。中国駐在大使といったら日本の外交官の上がりの一つです、頂点です。アメリカ、イギリスと並んで中国というのは頂点です。どうして韓国を選んだのですかと聞いたんです。そうしたら須之部さんが、非常に恥ずかしがる人なので、そういうことを胸を張って言う人じゃないんですが、私が問い詰めたもので「韓国との外交というのは日本外交の原点でないでしょうか。もしも韓国との外交がうまくいくようなら、日本外交はどこでもうまくいくはずですよ。私はそういう考えでした」とおっしゃる。そういう外交官がいるのかと思って感激しました。

その方が、これは韓国人から聞いたんです。日本のアジア外交の真髄はどこにあるか。「理屈3割、情7割」、外交は冷徹であるべきだ。国益を守るためには冷徹であるべきだけれども、アジア外交は「理屈3割、情7割」だと言われた。

彼は現実の外交官ですから国益をはずして仕事をするはずがないわけです。それを心においてやれば、アジア外交は何とかいくのではないかと、国益が守れるのではないかという意味なんです。その種の難しさというのが、韓国との関係にはあるんだということを感じております。そういうスタンスで日本が取り組めば、先ほど申し上げたような土地は耕されているように、私は感じるのです、新しい世代も古い世代も。もちろん頑固な人はいます。だけれども、それはどこの国にもいるわけで、だからと言ってそれにこだわる必要ないというのが私のスタンスであります。

**小倉** どうもありがとうございました。やはり私も外側から見ていて、日本の外交は、非常にアジアとは違うなと思います。つまり韓国の外交、北朝鮮の外交を見ても、やはり「理と情」をフルに使っているというような感じがします。日本も昔、戦前の外交というのは、そういうところがあつたような気がしますけれども、最近はどうも両者をフルに使って

ないような、私もマスコミを通しての印象しかありませんので、そういう印象を持つのです。つまり「理と情」というものをフルに使うというものがアジア的など言ったらおかしいですけども、そういう外交の一つのあり方としてあるのではないかなと思います。まさに須之部さんのお話にそういうことがあったというお話でした。

いまの饗庭さんのご発言に対して何かご意見とかありますでしょうか。道上さん、どうぞ。

## 歴史と安保を避けてきた日本社会

**道上** 須之部大使は私が最も尊敬する人です。2つほど申し上げたいと思います。

戦後の日本社会は2つのことをなおざりにしてきた、逃げてきたと思います。一つはセキュリティ、もう一つはヒストリー。安全保障と歴史ですね。第二次大戦後、自国の歴史を直視しなかった。多くの日本人は、「戦争」といえば「日米戦争」の印象が圧倒的に強い。しかも広島・長崎や大空襲の「被害者」という自己イメージが先に立つ。アジアで、中国や東南アジア諸国でいかに自分たちもその国の方も悲惨な目にあっただが、記憶から飛んでいる場合がある。さらにその前に、朝鮮や台湾を植民地とする過程でどんなことがあったかということは、もっと知らない。自国の歴史の光と影をきっちり見つめることをしなかった。アジアの方々が日本に対して持つ複雑な心情に目が、心が届かなかった。全体の傾向ですが、いわゆる保守的な人に多かったともいえる。

片や日本は、セキュリティ、安全保障というのもないがしろにした、直視しなかったと思うのです。これはいわゆるリベラルな人たちに多かった。まず、平和憲法があるから日本は平和だ、戦争はないと。もしそうなら世の中は楽でいいんですけど、全然そうではない。世界には、悪い人も国もいるのです。戦争もテロも起こるのです。しかし、戦後日本は20年、30数年、無責任で非現実的な発想の中にあった。日米安保についても合理的な議論ができないことが多かった。「平和と安全」は人間社会の最も切実な課題なのに、真剣に取り組んでこなかったとさえいえるでしょう。

日韓が国交を回復した1965年もそうで、当時リベラル、左翼の人がむ

しろ日韓国交正常化に反対したのです。どうしてかということ、韓国を暗黒視していたからです。拷問、軍事政権、危険と極端に悪いイメージを形成し、対する北朝鮮はむしろ「地上の楽園」視していた。悪い韓国の肩を持つと、統一を永遠に妨げることになるから反対という、今ふり返れば、あきれほどの国際認識のまちがいがあったのです。

以上二つをまとめて、日本社会が歴史と安全保障を軽視してきたと思うのです。戦後すぐの余裕のない時期はともかく、これを長く引きずってしまった。健全な市民感覚の不足ともいえるし、政府にはこれが負担になる局面があるともいえます。日本が国際社会で誤解される根っこが、ここにあります。最近ようやくそれではいけないと、右も左も、評論家も新聞も、合理的な議論ができるようになってきたと見ています。試行錯誤のなかでやや極端な意見があるのも事実ですけど、私は、大づかみにいえば基本線ではよくなりつつあるし、よくなるのだらうと思っています。

最後に、「アジア外交は理屈3割、情7割」という言葉に、私は正直申しまして違和感があります。外務省の心ある優秀な先輩方は、日本社会の「理」が貧弱であることをカバーする必要を感じ、「情」という言葉で表現したのでしょう。アジアに対する近現代史を踏まえた外交という感覚が、25年前には、今よりもっと乏しかったのでしょう。その「理」にだけ従ってはいけない、もっと広い視野を持つべきというのは、正しい方向だと思います。でも、本筋は、日本がもっとしっかりした「理」を持つべきということでしょう。また「情」というのも、それこそ情緒的で、やや不透明な感があります。

最近、外務省のチャイナスクールというのが批判されるんですね。外務省のチャイナスクールは日本よりも中国のほうを向いている、中国配慮ばかり考えているという極端な批判もある。私も先輩、友人に中国専門家は多いですが、そんな人はいません。ただ、さっき申しました安全保障、歴史を日本社会がなござりにしてきたという「荷物」を、役人が背負い過ぎているのかもしれない。これからの外交は、一勿論外交機密はあるのですが、「こうすればこういうメリットがあるが同時にデメリットもある」という構図を、できるだけ示したいです。外交は相手があることで、こちら相手も国を背負うので、100%の勝利はないのです。譲るべきこと



も出てくる。相手方への配慮をすべき場合はあるのですが、その時、「情」という漠然としたものでなく、よりクリアに説明したいものです。「情」では、国民への説明責任を果たせないでしょう。今より困難な時期のアジア外交を担っていた先輩方に敬意を表しつつ、でも今後は違う次元の外交を拓くべきだし、現にそういう時代に入っていると申し上げます。

**李敬宰** 私は外交の問題はよくわからないので、それは置いておきたいんですけど、ちょうど北朝鮮と日本が交渉を再開して、拉致の問題を明らかにしたときに、私は自分のところでやっている小さな団体のニュースに「金正日（キム・ジョンイル）一人勝ち」というタイトルをつけたんです。あの人は非常に奇策を弄する方ですから、ひょっとしたらいまの日本のこの大騒ぎもすべて作戦のうえかなあとってしまわんこともないわけです。例えば、彼がこのままずっともましていって5人に対して国家賠償しますと言って、1人1億円ぐらい出して、5億円ほど払ったとする。国交交渉のときに経済援助方式はやめて賠償方式にしてくれと言って、掛ける1億円にしてくれたら向こうはめっちゃめっちゃ儲かるなあとか、こんなことを私は考えてしまっているんですけども。日本の外交されている方が、そういう意味では非常に強硬に「北」に強くなれとかいって、マスコミの圧力もありますからずいぶん強いなあとと思うんですけども、本当に強いのかどうかはもう少し見てみないとわからないんじゃないかと思うんです。

もう一つ核の問題についても、北が核を開発すると、あそこは野蛮な国だからいつ打ちよるかわからんぞとかいうふうな雰囲気広がっています。けれども、少し視点を変えてもらって、皆さんが北の住民であれば北から日本を見て、日本が核を持っていない、あるいは核開発する技術が全然ないというふうには思わないと思うんです。ひょっとしたらアメリカさんと一緒になってもうすでに配備しているかもわからない。あるいは独自に持っているかもわからない。持ってなくても、すぐにでもつくってしまう技術を持っているかもわからない。こういうふうに見たときに、北からすれば日本の核の脅威はすごいものじゃないかなというふうな。ところが、日本とかアメリカは核を理性的にコントロールして、決して野蛮なことでは使わないとか、こんなふうに使われているのかもわからないけれども、そんな考え方はいかがなものかなあと私自身は思います。核の脅威はどち

らにも存在してる。北にも存在してますし、日本にも存在している。ですから、あんまり一方的に見ないほうがいいんじゃないかなあと思ってるんです。

今日の北への報道について「在日」の視点から見ると、「在日」の皆さんは萎縮してるんじゃないかと饗庭先生のご意見もありましたけれども、私が拉致の問題が明らかになったときに在日韓国・朝鮮人の声明というのをを出しまして、朝鮮総連は拉致の事件に関わったかどうか独自に調査して日本社会に公表すべきや。金正日さんは責任を取って退陣すべきだとか、そうした5項目ぐらいの、おおよそ「在日」が言わないようなことを言ったわけです。なかには李さん大丈夫ですか、心配ありませんかというふうに気遣いしてくれる方もいらっしゃいましたけれども、その声明を10月の初めに出して、ほとんど反応がないんです。私の文章がへたくそだからたぶん無視されたのかなあと思わんことはないわけですけれども。ここで「在日」はしっかりとものを言うべきだと思うんです。日本社会のなかで私たちは共生していこうと言っているわけですから、日本人がちょっと言いにくいことを「在日」ならば言えることをしっかりと行っていくということが、この社会を共生社会に導こうとしている「在日」の立場の責任性じゃないだろうかと思っております。そういう意味では、今後さらにいろいろと言っていきたいなと思っているのですが。

## 「拉致」騒ぎがおさまると日本にハネ返る

日本の「北」バッシング、いまのマスコミ報道、私はもう少し続けてもらってもいいんじゃないかなあと思ってるんです。何も北が憎たらしいからじゃなくて。日本人があるときにふと気づくと思うんです。いま拉致で帰ってきた人たちを日本がどう迎え入れようかと必死になって考えてるでしょう。国会では5人のために特別立法までつくると言って、あの人たちの生活を支援すると言ってるわけです。そんな個人の生活を支援するような法律をつくっていいんかいなと、私も支援してほしいなと思うんですけども。(笑) 日本はそんなぐちゃぐちゃな国になりかけているわけです。もうちょっとすればさめてくるやろう。さめてきたときにふと振り返ると、じゃあ日本社会は「在日」に対していったい何をしてきたのかとい

うことに気がつくと思うんです。北の金正日に対していろいろ批判的なことを言っているわけですが、日本の過去のそういう政策を担当してきた人たちに対する視点はいったいどうなっていくのかということ、ちょっとそのうちに鏡がびかっと光ってきて、自分の日本人の姿がしっかり見えるようになっていきますので、私はいまの報道をもう少し続けるべきだなあというふうに思っています。

今後の日本社会の共生、対話のあり方とかいうことなんですけれども、私は二極化していくと思うんです。一つは外国人と共生していこう、国際化していこうという人たちと、もう一つ天下の石原都知事みたいに外国人の悪口いっぱい言いまくる方々が結集されてやっていくようなことになるんじゃないかと見ています。

いま現実に、これは私の近辺で起こってることなんですけれども、在日韓国・朝鮮人、私なんか日本生まれ育っているわけなんですけれども、その次の世代も、本名を名乗っているとアパートが借りられない、いわゆる入居差別を確実に受けます。ついこのあいだまで、ニューカマーの人たちがやってくるまではそんなことがなかったんです。初期のころはありました、ずいぶん前。「在日」が運動して入居差別するなど言ったら、いつか影をひそめていったんです。ところが最近また出てきた。要は外国人風の名前で入居の契約などが来ると、だいたい家主さんが断るような傾向があります。北海道では銭湯に外国人を入れてくれなかった。その人は腹が立つから日本国籍を取って、日本人やと言ったら顔が外国人だからあかんとか言って。その判決がついこのあいだ300万円ほどの損害賠償の判決が出ましたけど、そういうふうになってきてる。

もう一つ怖いのが外国人の犯罪報道です。外国人の犯罪報道が増えると言って、皆さん絶対信じ込んでいると思うんです。増えているのは増えている。だって外国人の人口がこの10年間ぐらいで倍になっているわけですから、犯罪もいままで10件だったのが20件になる。この10件は増えたことになる、間違いはないんですけど。外国人の犯罪が凶悪化してるかということとそんなことあらへん。外国人の犯罪で強盗だとか殺人だとかありますけれども、多くの強盗と殺人の犯罪の90何%は日本人の犯罪なんです。そっちのほうがもっと怖い言うねん。そのことをマスコミは全然報

道しないわけです。外国人が4人か5人ぐらいで犯罪をするとグループ化している、中国マフィアとちゃうやろかとか言ってやってるわけです。外国人の犯罪がグループ化する理由はわかるねん、見張りちゃんと立ててやってるわけですから。日本人の犯罪はグループ組んでやると分け前が減るから嫌やと言うんです。だから、大体個人か2人ぐらいでやらはるんです。そういうもんなんです。凶悪化全然してない。ないとは私は言いません。外国人の犯罪もあるわけです。日本人の犯罪と同じぐらいあるという、ただそれだけのことです。ところがマスコミは連日連夜、外国人の犯罪が凶悪化している。この次は、組織化してると言って警察庁発表しますよ。そうした外国人を排除するような論理がどんどん強まってきているんです。

もう一つは私のところの団体がこのあいだ、コピー機を新しくしようと思って契約書に李敬宰と書いたら、リース会社5社からみんなはねられました。理由は外国籍だからということです。これはこのあと、差別事件として私の地元大阪へ帰ってしっかりと取り組みたいと思っています。こういう社会になっていっているということを、現実をもう少し知ってほしいです。先ほど須之部さんは外交官でしたけれども、須之部さんが韓国へ行って韓国語でしゃべって田舎のお年寄りたちを泣かせたというのだったら、日本の行政マンが「在日」のところへ来て「在日」を泣かしてほしいわけです。こんないいシステムをつくりましたから、どうぞこれを享受してください。私はぼろぼろ涙を流して喜ぶんですけれども、そういうことをやっていただきたいなと思っております。

**小倉** 日韓の関係というところから日本と北朝鮮の関係、「在日」、日本の社会のなかに暮らしている韓国・朝鮮の人たちの話、それとの共生という話に、もちろん当然そういうふうになるわけですがけれども、これに限らず何かご意見ある方、いらっしやいますか。

## 「韓国人だから」「日本人だから」を超えるとき

**金恵京** テーマがこれからのコミュニケーションのためになるので、そのことです。

日本でよくあることなんですけれども、韓国人の場合は、日本人と会話するとき、あなたは韓国人じゃないからわかり合えないんだと考えるん

です。日本人もずっと話しかけてどうしても通じないとき、あなたは日本人じゃないからわかり合えないんだということを決めつけるんですけども、人の往来が少なかったいままでだったらそんなに大きい問題はなかったかもしれないんですけど、ここ2、3年のあいだには日韓を往来してる人が300万人をずっと超えてるらしいんです。そういうたくさんの人たちがおたがいに日韓のあいだで訪問しあう現在の時代のなかで、自己感情だけで生きていくことはおたがいの関係を悪化させるんじゃないかなと思います。

ちょっと子どものころアメリカで生活したことがあって、例えばアメリカ人の場合は、あなたは韓国人だからとか、何々人だからわからないんだという概念を持つてる人は少なかったと、私の経験から考えるとそうだったんです。でも日韓の場合はそうじゃない。感情的に走りやすい。決めつけるんです。韓国人だから、あなたはそうなんだとか、日本人だからそういう考えなんだと。でも、おたがいの違いを認めないといけない。これからのコミュニケーションのために、おたがいのことを認め合って、その違いを理解してコミュニケーションを図らなければいけないと私は思っております。

**小倉** 何人（じん）だからどうだ、何民族だからどういう性格を持つているというのは、非常に乱暴な議論だと思いますね。ほかに何か。

**高崎** 今年の正月にテレビでもって「韓国のおばちゃんは偉い」というのが放映されました。西田ひかるという人気のある女優さんがテレビのなかで韓国語をしゃべるといので非常に驚いたんですが、まもなく今度は「フレンド」というテレビドラマ、日韓共作のが放映されて、こちらのほうは深田恭子という人がやはり韓国語をしゃべるわけです。そういうふうにごく一部の人が韓国語を話すという時代から、そういったテレビではあるけれども、普通の人がと言うか、あるいは人気女優が芝居のためとはいえ韓国語を勉強してしゃべるといふことで、これはものすごい変化だといふふう思ったんです。おそらくそういうテレビを観る人の多くは韓国に非常に興味を持つというか、近親感を持つというか、要するに日韓関係をよくする方向にいくだろうと思うんです。

ところが一方で最近、新宿の東映で見た映画は「宣戦布告」という映画

なんですけども、ご存知でしょうか。麻生幾という人が原作書いて50万部ほど売れた本をもとにしてつくられた映画なんです。北朝鮮の潜水艦が十数人のゲリラを能登半島に上陸させて、その人たちが美浜の原発を襲おうとする。日本の警察、自衛隊、政府がおたおたする。そこから出されているメッセージは日本の政府、警察は北に対してもっとしっかりしないとイケないというメッセージだろうと思うんですけど、こちらのほうの映画を見ると、どう見ても北朝鮮に対して好意は持ってないです。

## 韓国との交流経験、北朝鮮に生かす

問題は韓国についてのイメージが非常によくなくなってきて、北朝鮮に対するイメージは前からだいたい悪かったと思うのですが、極度に悪くなっている。日本人のなかで韓国人に対しては好意を持つけど、朝鮮人という言葉を使えば、そちらに対しては非常に敵意をいだくような状況が出てきています。しかし韓国人、朝鮮人というのは同じ朝鮮民族です。韓国人、朝鮮人というふうに日本人のなかで分けること自体もまたいろいろ議論があると思いますけれど、とにかく分けつづけるのかどうか。やっぱり北に対して敵意を持つ人が韓国人も同じ民族だからなというふうになるのか、それとも韓国と日本の関係も40年前はぎすぎすしていたけど、ずいぶん変わったからなあと、北も韓国と同じように変わるだろうなというふうになるか、非常に心配なところです。

韓国との関係については何度もお話してきたように、また先ほどのテレビの例を見ても、私は非常に楽観してるんですが、それが北朝鮮を媒介として逆転してしまう可能性なきにしもあらずという感じがしている。逆転するとか、北を媒介にしてというのがどういう意味か、おわかりいただけたかどうかちょっと心配なんです。要するに韓国との関係だけならいいんだけど、北朝鮮の人たちと同じ民族だからなというふうなかたちで、それがまた逆転するのではないかという意味なんです。

そういう意味で、これからどうしたらいいかということについてですけど、いまの日朝交渉も日韓会談をモデルにしてるところがありますけれど、北も韓国のことを批判しながら結構、モデルにしてるところがあると僕は思ってるんです。金正日（キム・ジョンイル）という人は朴正熙（パ

ク・チョンヒ)をモデルにしつつあるのではないかというふうに思うんです。表面は先軍政治、軍隊優先政治だけど、実際は経済第一主義でこれからやっていこうというふうに思っているのではないかと私は思ってます。そういうことも含めて日韓交流の経験を日朝交流の経験に生かすというふうなことが、これからおそらく求められるだろうと思うんです。そういう観点からもきょうお話ししてきた日韓の関係について、それをあんまりいい言葉ではありませんけれど、教訓化すると言いますか、あるいは整理しておくということが必要なんではないかというふうに思います。

**小倉** 確かに韓国の人気俳優のウォン・ビンという人と金正日が同じ民族の人だというのは普通の人はあまり感じないんですけども、実際に同じ民族でありますし、同じ民族だからどうのこうのというわけでもないんです。「在日」でも多様な人がいる。日本人のなかでも多様な人がいるけれども、少なくとも民族的なルーツを同じにした人であるということを一回気づくと、なにか朝鮮半島を見る目つきが変わってくるのではないかなというふうに思いますけれども。饗庭さん、どうぞ。

**饗庭** いま高崎先生の言葉に触発されてですが、北朝鮮という要素を入れてこれからの日韓関係は考えていかなければいけないと思いますね。

つまり日本の朝鮮半島への視線ということになるだろうと思うんですが、それについて北朝鮮の方とはここ数年お話ししたことがないんですが、韓国の方と話をしている感ずることの一つは、彼ら自身がこれから南北の統一に向けて同族主義でいくのか、それとも38度線で分かれているという現実主義でいくのかということについて、極めてアンビバレントな状態にあるんじゃないだろうか、彼ら自身が。例えば前の金泳三(キム・ヨンサム)大統領は就任直後に「民族に勝るものはない」と言ったときに、私は大変ショックを受けました。いまの大統領がそれでは同族主義なのか、それとも現実主義なのか。これは例えばアメリカという鏡に映し出してみれば、彼自身の北に対する考え方というのは極めてアンビバレントだと思うんです。だから、われわれ日本人がこの問題についてはっきりした見方がある程度のまとまったものを持とうというのは、極めて難しいことなんでしょう。ですから、われわれの考えを固めるためにも韓国の人、その日本人たちはどう考えているのかということ、つめて聞いてもあまり意味のな

い、いま状態ではないだろうかなあと。アンビバレントなものなのなんではないかなあという気がしてるんです。

## 過去を「水に流して」でなく「踏まえて」

それから、ついでにちょっと発言させていただきますと、須之部大使の3割7割説、道上さんは間違いなくとらえてくださっていることはことわかりましたが、万が一誤解があるといけませんので、その背景はこういうことです。

日本人は歴史を考えると、とにかく「過去は水に流して」なるわけです。われわれもずいぶん韓国の人と議論するとき、「そんなことをいつまでも言ったら、あなた方のためにならないんじゃないの」。それは例えば1965年に朴正熙さんとか、金正日さんが決断したことですよ。そういうことを考えると、「水に流して」というのが日本人。ところが朝鮮半島、中国の人、私は北京にもしばらくおりましたので感触的にはわかっているつもりですが、「過去を踏まえて」なんです。過去を踏まえて手を携えて前へ行こう、なのです。われわれはとにかく過去は水に流してと、言葉では言わないまでも心理的にはそういう状況にある。これは思い出したくない、私らの世代だと戦争のことを知ってますから、思い出したくないんです。からめたくない。だから「水に流して」と言えればそれに越したことはないんですが、中国、韓国の方は「過去を踏まえて」です。これはどうしようもないギャップです。そういう現実を考えた場合に、かの人たちとの外交というのはどうあるべきかという現実論なんです、これは。感情論じゃないんです、それが一つ。

それからもう一つ、私は北京にいるときに中国共産党の機関紙『人民日報』の人と議論していて、はっと思ったことがあるんです。ある特定の話題で、この報道は事実に反するじゃないかと言ったら、彼はやっと笑って、われわれの報道、編集方針は「事実2割政治8割」だと言うのです。いまは知りませんよ、20年前です。少なくとも韓国では、私は最初のプレゼンテーションで申し上げたかもしれませんが、体制としては同じになっています。そういうような状態じゃないんです。そういうなかでも、やはり日本というものは過去をどう踏まえるかということを考えてときに、具体的



な外交で何が必要かということを指されたんだろうと思います。

**小倉** この第3部も終わりに近づいてまいりましたけれども、もちろん何か統一的な見解がまとまるということではございません。それぞれのパネリストのお考えをいま開陳していただいて、その考え方の全体、あるいは断片からここに集まっていらっしゃった方が、何かを持ち帰っていただければいいというふうに思うのです。

最後にひと言ずつ各パネリストの方々、いままでに発言されたことをもう1度確認という意味でも構いませんし、まったく新しいことでも構いませんので、ひと言ずつこれからの日韓関係について、あるいは「在日」のことでも北朝鮮のことでも構いません、何かご提言なりありましたら、お願いいたします。

**李敬宰** ひとことだけ先ほど誤解があったかもわからないと思うのですが、日本が拉致問題で真相解明だとか、謝罪だとかいろんな問題が出ていますけれども、過去の問題で今日韓国でもなお真相解明してほしいという、要は自分たちの親族がどこで、どういうふうに死んで、行方がわからなくなっているわけですけど、そういうことがまったくわかってないことも今日なお残っているということなんです。皆さんは北の拉致の問題で「真相解明せえ」と言えば、ここにいらっしゃる皆さん全員そのとおりのやなと言わはると思うんですけれども、ところが過去の歴史のなかに出てきた、韓国侵略・植民地の関係での真相解明については日本の人たちは全然賛成してくれないんです。だからいまなおほったらかしのままに近い状態であるということもあるわけです。だから私は先ほど、いま日本のマスコミがもっと騒いでほしいと。真相解明せえとか、国家賠償ちゃんとせえ、責任者処罰せえとかって騒いでほしい。そうすれば日本の姿ももっとくっきりと、過去の日本人の姿がくっきりと浮かびあがってきて大きな反省の材料になるのではないかと。それが基本的にないと、外交も国際関係も、うまくいかないんじゃないかなというふうに思っております。

**小倉** そうですね。私も非常に似た考えを持ってしまして、私が韓国に8年間暮らしていたときの、韓国のマスコミ、あるいは政治のやり方ってのおかしいなというふうにいつも思っていたんですけれども、やはりそれがあつた時期には必要だということを感じたりもしております。道上さんいか

がですか。

**道上** 日韓関係という話をこえて、いつも後輩たちに言っていることを、みなさまへのメッセージとして二つ申し上げます。

## 異質な他者との対話を、歴史と外国語を

一つは、異質なものとつきあい、学べということです。自分のことは自分でわからないことがある。個人も国、社会もそうです。自分のことは自分がいちばんわかっていると思いがちですけど、果たしてそうでしょうか。ほかの人から、あるいは国なら外国からでない自分が見えないという面もあると思うのです。自分の把握、セルフイメージというのはどうしてもすごく膨らむか、逆に萎縮するかであって、等身大の自分は、自分の背中は見えないことがある。ほかの人から言われてはじめて気づくことがある。国と国もそうだし、個人と個人もそうだと思います。もちろん他者の意見がすべて正しいわけではなくて、そうでないときはそうでないと言えいいのですが、他者との対話によって、あるいはほかの国と向き合うことで自分が見えることがあるのです。異質なものとの交流、議論を拒んだら、狭いタコツボにはまり、自分が成長しません。

メッセージの2つ目です。若い人は語学と歴史を勉強してほしいと思います。語学というのは外を知ることです。外国を深く知り、自国を振り返る最強の武器、手段です。更にそれによって外国の友達を得られたら、一生の財産になるだろうと思います。歴史も別に1日1時間本を読めということではない。日本史でもいいし、ヨーロッパでも韓国史でも何でもいいんです。誰しも日々の生活で忙しく、地べたを這いまわっているわけですが、大きな視点に時には触れたい。自分を、自分の抱える問題を、高い視点から鳥瞰することができれば、変にみじめになること、変にうぬぼれることが減るでしょう。30代になっても50代になっても、豊かな人生という面で、あるいは仕事の面でも、意味のあることだと思います。以上です。

**小倉** 何か外務省の部下か後輩に言うようなことで、非常に賛成です。そのように外務省の後輩を育てていただきたいと思います。われわれは外務省の批判もちろん一般国民としてしますけれども、それは日本の外交

がよくなってほしいという意味でしているのであって、外交官が素晴らしい仕事をすれば、それだけ日本もよくなるわけですから、道上さんがどんどんそういう方を育ててご自分も立派な仕事をしていただきたいと思います。金さん、いかがですか。

**金恵京** やっぱり言葉に対する大切さを言いたいですね。

私は、最初日本に来たときに中途半端な日本語で、いまでも全然下手なんですけれども、最初あまりわからないときには、日本人が言ってることをよく誤解したんです。その誤解はどうして生まれるんだろう。それはただ言葉なんです。

その国の言葉を知れば、その国の考え方や歴史観や歴史認識を知ることができると思うんです。やっぱりおたがいの国の言葉を少しずつでも理解していくうちに、外交がうまくできれば国際関係の外交もよくできるんじゃないかなと思っております。

**小倉** そうですね。言葉というのは非常に重要だと思います。その言葉を習う動機というのは、そんなに高尚なものでもなくてもいいと思うんです。NHKの「ハングル講座」というのをやってますけど、そこで今年初めて韓国語を習い始めましたという女性の方は圧倒的にウォン・ビンという俳優が格好いいということで始められた方が多いんです。それも一つのいいきっかけだというふうに思います。饗庭さん、いかがですか。

**饗庭** 私は異議を唱えます。たぶん小倉先生がすてきだから習いはじめたと……。 (笑い)

**小倉** そんな人は1人もいません。

## 日韓横並びの位置関係から

**饗庭** 今後の日韓コミュニケーションに楽観している。どうかたちでやるべきかということについて2点。一つはここ2、3日前だったと思うんですが、韓国の新聞をインターネットで読んでいましたら、韓国人のあごがなくなったというニュースがありました。えらが張らなくなったというのです。こういう記事がありました。それを見て私は実は息子が3人いるんですが、これが情けないことに咀嚼力が弱いんですよ、私なんかに比べて。よく見るとあごが尖がってるんです。食生活のせいでしょう。そ

それは別として生活感覚が本当に共通化してきたな、それならばこれは望みがあるぞということからの結論です。

それからもう一つは、よくこういう会合に出てくる雨森芳洲\*、彼が習ったという朝鮮語の本があるのですね。小倉先生なんかとうにご存じだったんでしょうけど、私は最近知りました。それは『隣語大方』という、隣の言葉という本を、日本人も朝鮮の人も同じ本をおたがいの言葉を習うために使った。よくいま、韓国での日本語習得者のほうが日本での韓国語習得者よりもぐんと多い、これは何とかしなければいけないというのが、たぶんテーマの一つだろうと思うのです。どっちがどっちを習う関係ではなくて、18世紀の日本人と朝鮮人というのは、こういう位置関係で隣語ととらえていたんだなあと感じを受けたのです。たぶん、これからの若い人たちの双方の学習というのも、そういうアプローチであってほしいし、そうあるだろうと期待しております。

**小倉** そうですね。確かにわれわれ東アジアの人たちってというのは、やはり往々にして垂直的な上下の秩序でものを考えるということがありますから、いかに水平的ないちばん最初に伊勢さんのお話がありましたような、水平的な関係をいかにつくれるかということ。しかも東アジアの文化というものを破壊しないで、そういう関係をつくることができるかということが、一つのこれからの大きなポイントになってくるのではないかなというふうに思います。高崎さん、いかがでしょうか。

**高崎** 最後にひと言ということで、「相殺論」という言葉をメモしたんですが、それを書いたときに「相生論」という言葉があるかないか知りませんが、そうあるべきではないかというふうな感じがしたんです。相殺論というのは日本人もひどかったけど朝鮮人もひどいというふうな考え方です。どっちもどっち、賠償もしなくていいし、謝罪もしなくていいという方向へ行きやすい考え方だと思うんです。相生論という言葉があるとすると、ともに生かすということで、日本人はひどかったことについて謝る。その代わりに、朝鮮人にもひどいことをやったことについて謝ってもらう。そういうことだろうと思うんです。

それとの関連で、きょうも出ましたけど、1940年代、戦時に起こったこと、1970年代の平時に起こったことは違うという考え方があります。その

\*雨森芳洲 あめのもりほうしゅう 1688~1755  
近江国出身の朱子学者。22歳から対馬藩に仕え日朝外交にあたる。  
木下順庵門下で新井白石と同窓。

ときの国際法というのは、確かにその背景にある時代の常識と言いますか、40年代の国際法と70年代の国際法では違うということはそのとおりだろうと思います。しかし、人の悲しみという点では同じだろう思うんです。あるいは、ある意味で40年代に強制連行されて帰ってこなかった人の奥さんは50年以上、夫を待ちつづけて暮らしてきたわけです。そういう考え方もできるわけです。ですから相殺論というふうなマイナス思考ではなくて、相生論というふうなプラス思考で双方がいい方向にいかないと、やっぱり悪循環は断ち切れない。「善循環」とか、「良循環」という言葉はないとは思いますが、悪循環を断ち切って善循環、良循環の方向に進んだほうがいいのではないかと思います。

**小倉** そうですね。やはりマスコミもそういう方向に、ある程度の時期になると方向転換をしてくるのではないかなというふうに思います。そのためには高崎さんをはじめとした歴史学者がいろいろ頑張って事実の掘り起こしをしていただいて、それを社会に還元するという、そういうシステムというのをできるだけ強力につくらなくてはならないなというふうに思っていますけれども、伊勢さん、いかがですか。

**伊勢** きょうは6人の方たちから見た韓国というもの、それから日本というもののお話をうかがえて私たちは習うところが多かったと思います。それからもう一つ大事なところは6人の方の世代が違うということ、これは非常に大事なことで、長いスペクトラムの感覚というものができたのではないかと思っています。きょう、私は結論として、いま小倉さんからご要望があったんですけども、一つお願いしたいことは、皆さんがここで議論をやめないで教室にお帰りになったり、いろんな市民団体の会合でも、こういうことをもっともっとこれからも議論をしていただきたい。若い方たちに、特に続けていっていただきたい。これがこのフォーラムの目的ですので、ぜひお願いしたいと思います。

## 東アジア文化圏——「魂」が生きる・日韓中に独自の領域

**小倉** 最後に私も僭越ながらひと言だけ申し上げたいと思います。

私は、個人的な話になりますけれども、先ほど申し上げたとおり、歴史問題に対する東アジアなりの解決についてこれからじっくりやりたいなど

思っております。

東アジアには魂という曖昧なものがありまして、個人にすべて還元できないんです。魂というのがわれわれが死んだ後もこのへんにフヨフヨしてまして、だいたい儒教で言いますと、3代か4代は完全なりアルなかたちで、ここに魂というものがあるわけです。それは中国も韓国も日本も共有してるわけですけども、そういう文化圏と、やはり西洋のように個人のレベルで一つ一つの責任が完結していく、そういう文化圏とはやはり違うと思う。

ですから、東アジアの歴史の問題というのはなかなか解決しないということがあると思うんです。そういう魂という厄介な、曖昧な領域にわれわれが踏み込まないとならない、そういう時期に来てるんだというふうに思っています。もちろん西洋との共有、共通の土台も確認しながら東アジア独自の問題を解決していく。そういうことも重要ではないかなと思います。

きょうはいかがでしたでしょうか。1時から非常に長いあいだご清聴くださいまして本当にありがとうございました。この議論が何かお役に立てればよかったですし、これから積極的に主体的に日本と韓国、あるいは朝鮮半島、それから在日の問題に皆さま方が関わっていく、そのきっかけになればと思います。本当に長いあいだご清聴ありがとうございました。(会場、拍手)

**伊勢** きょうは長時間、ありがとうございました。こういうフォーラムは必ず皆さまからのご意見、ご質問をおうかがいできる時間を設けるのでございますけれども、きょうは特に6人の方のお話をまぜうかがうということで、いたしませんでした。これを補うためにこれから別の席を設けることといたします。

**山崎(進行)** パネリストの皆さま、長時間にわたりご討議いただきましてありがとうございました。皆さまも大変お疲れさまでした。お手元にアンケートをお配りしていますので、ご協力のほどよろしく願いいたします。出口のほうで回収させていただきます。

それから、一つご案内申し上げます。きょうはこの後この近くのレストランでパネリストの方たちと交流会を持ちたいと思っております。きょうご参加いただきました皆さまのなかでもう少しお話してみたい、こんな

ことを聞いてみたいと思われてる方は自由参加ですので、ぜひお越しください。

では、お忘れ物などございませんよう、お気をつけてお帰りください。

# 会場参加者アンケートから

(抜粋)

- ▽「民際交流」のきっかけになった
- ▽「在日」の体験を聞いた
- ▽多様な意見、真実を知る大切さ。青森からきた甲斐があった
- ▽道上さんの最後のメッセージが印象的
- ▽在日コリアンと友人関係、もっと見直そうと思う機会になった
- ▽若い方が参加していることに興味津々（70歳）
- ▽多彩な人柄が（パネルに）出てよかった（20▽女）
- ▽感情論の日韓関係しか見えなかったのに対して、歴史認識のギャップによる日韓関係を知って面白かった
- ▽歴史認識について多様な考え方が聞いてよかった
- ▽いろいろな分野、パネリストでユニークだった
- ▽もっと女性パネラーを
- ▽学識によらず、個人の経験と主観による議論を意図したのがよかった
- ▽「在日」の若い方、女性の話を聞いたかった
- ▽生の声に出会えた
- ▽未来へ向かっているが過去の歴史問題を含めた話題は有益
- ▽民間次元で私たちがいますべきことを検討したい
- ▽歴史認識の乏しさを感じ、もっと勉強したいと思った
- ▽建設的方向をめざそうという姿勢に共感
- ▽外国のパネリストも呼んでほしい
- ▽韓国人、日本人、「在日」のフォーラムを
- ▽テレビや新聞では物足りない部分が満たされた
- ▽パネリストが多様でたのしかった
- ▽過去、現在、未来の構成も理解しやすかった
- ▽韓国について知識がなくても解りやすかった



▽いままで知らなかったことを学んだ。私たちの世代（19歳）が考えなければならぬことは何か、わかった気がする

▽歴史認識について白熱、複雑で、議論が必要なことが理解されて非常にすばらしいフォーラムだった

▽来た甲斐があった。何度か鳥肌がたつ感動があった

▽「民」レベルでの交流が大事だ

▽「東南アジア、東アジア」でのフォーラムをやってほしい



## アジア女性基金について

財団法人女性のためのアジア平和国民基金は、元「慰安婦」の方々への国民的な償いを行うこと、女性の名誉と尊厳に関わる今日的な問題の解決に取り組むことを目的として、1995年7月に発足いたしました。以来、政府と国民の協力によって具体的な事業を実施してまいりました。

元「慰安婦」の方々に対する事業は、1)元「慰安婦」の方々の苦痛を受けとめ心からの償いを示す事業として、国民の皆様のご協力を得た募金による「償い金」のお届け、2)国としての率直なお詫びと反省を表す日本国内閣総理大臣の「お詫びの手紙」、3)政府拠出金による医療・福祉支援事業から成り立っていました。この償い事業は、フィリピン、韓国、台湾において、285名の元「慰安婦」の方々に実施し、2002年9月末に終了いたしました。さらに医療・福祉支援を中心としたオランダでの事業は79名にお届けし、2001年7月に終了しました。インドネシアでの事業は2007年3まで継続いたします。

他方、武力紛争下における女性に対する暴力や人権問題、国際的人身売買およびドメスティック・バイオレンス(夫や恋人からの暴力)など、女性や子どもに対する暴力や人権侵害によって苦しむ方々は現在も後を絶ちません。

アジア女性基金では、過去の反省をふまえ、女性に対する暴力のない国際社会を築くため、国内外に女性の名誉と尊厳を守ることの重要性について啓発活動等、以下の活動にも積極的に取り組んでいます。

- ◇女性に対する暴力のない社会をめざすための啓発活動
- ◇女性が直面している問題についての国際会議の開催
- ◇女性の人権問題に取り組んでいる団体などへの活動支援
- ◇女性に対する人権侵害などについての原因と防止に関する調査・研究
- ◇暴力被害を受けた女性に対する援助者を育成するための研修

財団法人女性のためのアジア平和国民基金(アジア女性基金)  
102-0074東京都千代田区九段南2-7-6相互九段南ビル4階  
電話03-3514-4071 ファックス03-3514-4072  
Home Page: <http://www.awf.or.jp> E-mail: [dignity@awf.or.jp](mailto:dignity@awf.or.jp)



2002 サッカー・ワールドカップ共催のあと、  
日韓関係の新しい関係づくりのための対話（上智大学）

財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)

**ASIAN WOMEN'S FUND**

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

相互九段南ビル 4階

<http://www.awf.or.jp>

[info@awf.or.jp](mailto:info@awf.or.jp)

